

特217
161

小田原城史

神奈川縣立小田原高等女學校



始



特217 3

161

小田原城史

神奈川県立小田原高等女學校

特217
161



目次

(松本教諭稿)

序	1	舊小田原城とその附近(明治廿六年の小田原繪圖)	1
小田原城	2	小田原城南郭と城門(銅門)	2
土肥氏の領據時代	3	大森氏の館城時代	3
後北條氏の居城時代	4	北條氏の居城時代	4
北條氏	5	新英 雄 早 雲	5
早雲の甘一箇條(拔文)	6	氏綱の敬神と學問	6
氏康の人格	7	謙信の小田原包圍攻め	7
謙信の小田原包圍攻め	8	信玄の小田原襲來	8
氏直と北條氏の末路	9	氏政と關東武士の心	9
小田原 戰 役	10	秀吉軍方の一挿話	10
小田原籠城の死守と包圍軍	11	北條氏退城後の小田原	11
氏政と關東武士の心	12	先懸の常將忠世	12
秀吉軍方の一挿話	13	忠隣と武士道の精華	13





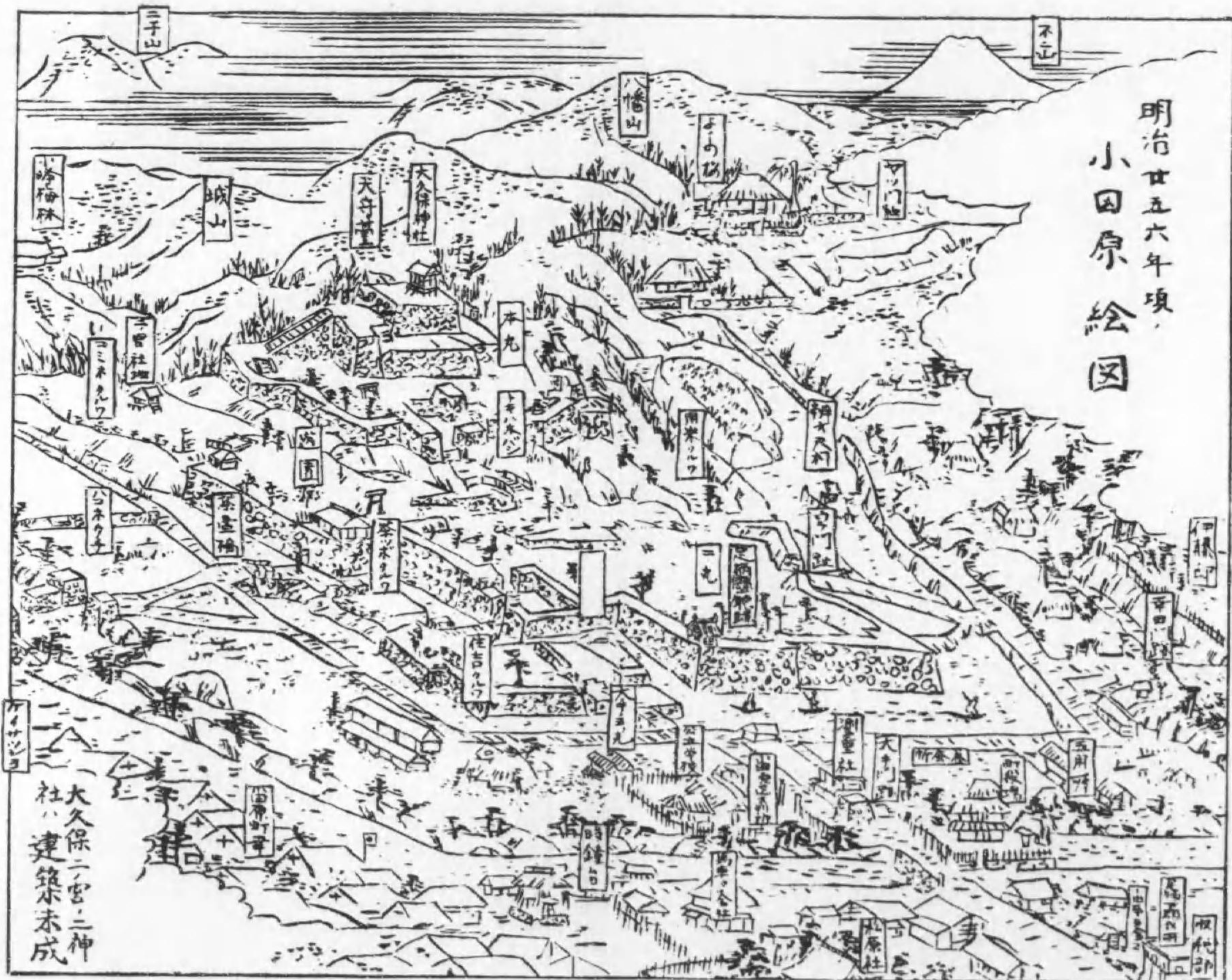
番 城 時 代
 稻葉正勝、正則、正征
 後の 大久保時代
 1 大久保氏の返り咲き忠朝
 2 忠増、忠興、忠由、忠顯
 3 忠實の尊王と奉仕の心
 4 最後の藩主忠禮
 明治時代
 明治天皇の小田原御巡幸
 北條氏時代の小田原城下町

小 田 原 の 文 化
 新城郭誕生とその発展
 小田原の自然景觀
 近世史に於ける小田原城下町の意義
 北條氏の善政と文化の保護

小 田 原 の 婦 人
 1 天目山の哀花武田勝頼夫人
 2 賢母氏康夫人の教育
 3 氏政夫人の哀悼の歌
 4 家庭を死守せる忠隣夫人
 5 日本婦人の典型太田備

結 論
 農業と新武
 工業と新器
 趣味と生活
 文化
 三
 三
 三





新編 小田原の自然景観
 近世史に於ける小田原城下町の意義
 北條氏の善政と文化の保護

小田原の文化
 新都市の商業
 工業と新武器
 趣味と新生活
 農業と文化

小田原の婦人
 1 天目山の哀花武田勝頼夫人
 2 賢母氏康夫人の教育
 3 氏政夫人の哀悼の歌
 4 家庭を死守せる忠隣夫人
 5 日本婦人の典型太田備

結 論

元 三 七



小田原城南郭



城門銅門



序 説

ふけゆけば箱根の山の山水の
音もきこゆる心地こそすれ

(井上通泰)

「一莖の野花にも大自然の歴史が宿る」とは古の人の詞であります。朝露かゝる足柄、箱根の連峯に、夕照映ゆる御幸ヶ濱の海面に、歴史は遠く二千有餘年、日本武尊の或は萬葉人の足柄越官道に、或は奈良、平安、鎌倉時代の王朝武家の古より東海道箱根越(初め間道なれど江戸時代官道となる)の宿驛として、或は又戦國繪巻開巻の地として、さては近世城下町胎生の魁としての小田原——彼を偲び此を想ふとき、歴史を思ふの心の故郷にこの胸に、迫り来る温さ、祖郷愛に心がひかされませう。

今小田原の地理歴史を眺めますに、箱根の外輪山を断ち切つて流出する早川の火口瀬は古より箱根越の入口で軍事地理上重要な地帯でありまして、我が小田原は實に此の河口に近く東海道の宿驛として、三島と共に天下の嶮箱根峠にかゝる西と東の重要關門であります。従つて畿内とこれを守る宇治勢多との關係にも似て、箱根、小田原は關東

の生命線であり、東國攻略の咽喉にあたる所でありまして、我が小田原を中心に古來幾多の古戦場の點散するについては、かうした卓越せる位置にあることを思ふべきであります。

この小田原は鎌倉時代に土肥一族の住地となり、やがて室町時代に其の跡を襲うた大森氏が早川を西に廻らす外輪山裾野の一角に小田原城を築き、關東足利氏の前衛として四代を續けたのであります。けれども室町幕府の政令が地方に及ばないやうになり、然かも關東管領また東國の鎮めとしての本來の使命を失ひかけました頃、時代の風雲兒北條早雲が出現し、大森氏を亡ぼして小田原城主となり、ここに始めて小田原の將來に輝き運命が約束され、我が町は新しき歴史的な段階に一步を印することになつたのであります。かくて二代氏綱、三代氏康、四代氏政に至つて小田原は忽ち鎌倉の繁榮を奪つて關東に於ける政治、文化の

淵藪となり、小田原城は近世的名城として、超然、日本の大小群雄の注目をあつめたのであります。この間京文化は東漸し、異邦支那文化また移植され、其の善政を謳歌する町人、職人等の遠く西國、北國より移住するものが多くて、我が小田原は戰國と云ふ時代の脚光を浴びながら鮮やかに大きくクロゾアツプされて「天下の小田原」と呼ばるゝことになりました。かくして我が郷土は、近世初期に於ける大名の居城を中心として發達した新興都市の先驅をなす城下町として、本邦史上に特異の姿を寫し出すことになりました。又築城當時は我が國唯一の市街包含城として名高く、外濠の延長實に八キロに及んだと稱されてゐます。其の後幾多の變遷を経たのでありますが、城下町としての發生した我が町は、他の新興都市と比べると判ります様に現在もなほ特殊なる都市型態を殘存してをり、然かも封建時代の小田原町は實に今日の小田原町發展の中核を成

小田原城史概説

小田原城は何時頃築城されたのでせう。然しそれは不幸にして現在のところ明瞭に判りません。たゞこの地には鎌倉時代の初め、凡そ七百年前頃から土肥一族の住地と

したものと言ひ得るのでありまして、この意味に於いて小田原城即ち、小田原史の研究は再び古の繁榮を復活せんものと動きつゝ、創られつゝある今日の小田原の意義を解明すべき秘鑰でないか誰が言ひませう。早雲以來春秋二〇〇に四百五十年、北條五代の歴史を経て、大久保氏、稻葉氏等の居城として明治維新に至つたのであります。そして今や祖國日本は現在の姿より過去を探り、現實の相より歴史を求め、物よりも精神に重點を置く傾向に變轉しつゝありま

す。かゝる時に昔の小田原、古への小田原を失念したる如く閑却された在りし日の小田原の土と人との史説に耳を傾け、目を注ぐことは意義あることではないでせうか、「早雲の政治」「氏康の學問」「幻庵の修身、風流」「秀吉の小田原攻圍陣」さては「貞烈勝頼夫人の流芳」「大久保忠貞の尊王」等々色々極りなき繪巻物を繰りひろげることに致しませう。

なつてゐたことは確實ですが、其の時までは箱根越の所謂「小田原宿」であつて、未だお城を築いてゐたと云ふ記録はありません。應永二十三年（紀元二〇七六年）上杉禪秀

の亂が起つた時、大森頼顯が戦功があつたため、關東管領足利持氏は土肥、土屋の領地をとりあげこれに與へて小田原城主となし、此の邊を鎮壓した記事が「鎌倉大草紙」に出てゐます。これが小田原城が歴史に登場した初めとされてゐます。

かくて大森氏四代間に小田原は漸く頭をもちあげて來たのですが、八代目藤頼の時早雲に亡ぼされ、早雲が代つて城主となつてから戰國時代を出現して猛烈な領土爭奪の渦中にありましたが、氏康の時には關八州を領して天下一、二の名城となり昇日の勢でしたが、五代氏直に至り秀吉に亡ぼされ、代つて大久保忠世が戦功によつて徳川氏から小田原城を與へられ、四萬五千石の城主となり、後城は一時

稻葉氏に代られ、再び大久保氏に復歸し幾變遷を経て終に王政復古の新時代に際して奉還され、明治三年遂にこの永い歴史を持つた城郭が取り崩され、やがて明治三十四年城内御用邸となり、昭和二年御用邸の一部をこの私達の學校及び小田原第二小學校の敷地として頂いたのであります。そして小田原は、かつての城下町としての名は忘れられずに、近代文化は進み、しかも上品な美しい町として發達してゐるのです。

春の花に秋の紅葉に、由緒ある小田原城を訪れる人々は日本の方々ばかりでなく、遠く海外からも國立公園の訪問者は我が小田原を訪れます。

土肥氏の領據時代

土肥一族は建久年間以前からの領主ですが、その中で土肥實平は源頼朝が治承年間に兵を擧げるや真先に彼に與みした大功臣であり、石橋山に、一の谷に、屋島に、源家再興の帷幄に參じた人物で、將亦頼朝の受難時代に於てすら常に彼の側を離れなかつたのです。

遠平がその後を襲ひ、その一族が榮え應永年中も小田原を中心とする豪族として勢を持ち續けてゐたのであります。やがては大森氏に代られることになり、こゝに土肥氏は大森氏の配下として餘喘を保つことになりました。

大森氏の館城時代

大森氏の祖先是關白藤原道隆の出であつて、親家の時鎌倉幕府に大功あり、駿河鮎澤庄大森を領してその地にちなんで姓としたのです。彼はその子次郎大夫と共に頼朝に仕へこの父子の戦功によつて次郎大夫は頼朝の頼の字を賜はり頼忠と改稱。この人から五代目が小田原初代城主頼顯で彼は小田原に移り西方警衛に當つたのでした。其子頼明、孫頼春、曾孫氏頼三世ともに關左の耳目として武勇の譽が高く、殊に頼春、氏頼の二代三十年間が大森家の全勢時代で、清泉院の創建、最乗寺の土木、總世寺の草創等に力を注がれました。

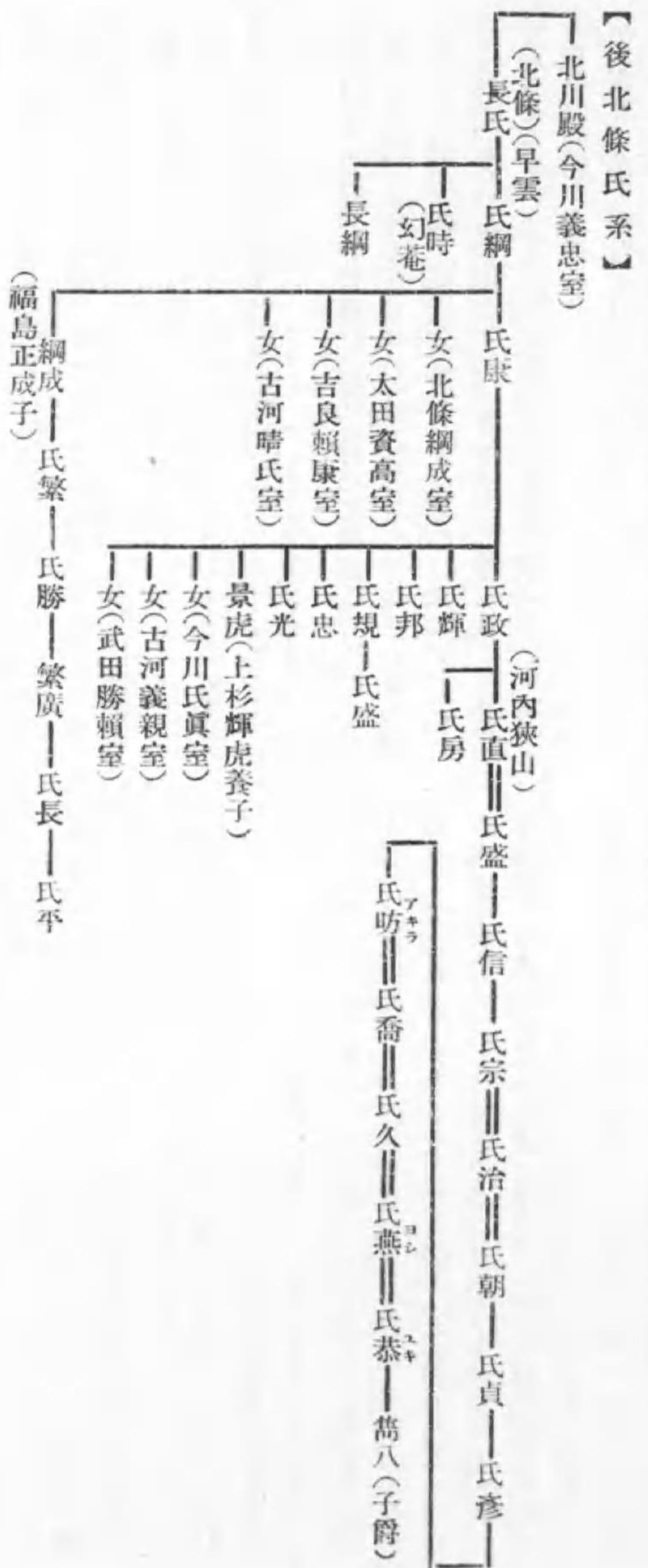
氏頼が相模川以西を領知して上杉氏の配下として威を振うた頃、堀越・古河兩公方が對立し、上杉氏は亦山内氏、扇谷氏となつて對抗しました。これにより關東は分裂騒亂し、に戦國時代の序幕を開いたのであります。氏頼は足利氏の名を顯しましたが周囲の事情は彼の目的を水泡に歸せしめることになつたのであります。其の子又遺業を継ぎ關東平定に力を盡したのですが効はありませんでした。けれどもひそかに小田原を窺つてゐた

早雲でさへ流石に氏頼の時には翼を收めて待機するより外なかつたのでした。

その子藤頼に至り、遂に早雲の詭計にかゝり滅亡の憂目に遭ひ、子孫は甲州武田氏に頼つて再舉を計りましたが信玄之に應ぜず志を達するを得なかつたのでした。大森氏の子孫は江戸幕府の旗本として寛政年間に至るまで僅かに家筋を續けたにすぎませんでした。

大森氏は公卿から起り小田原城最初の城主となり、八代百四十年間愛民撫育し今日の繁榮の礎石を据ゑてくれたのです。そしてこの大森氏のお城は何處であつたかは判然せず、たゞ後世其の遺蹟は谷津の城源寺の上の丘陵だとか、鍛冶曲輪邊りだらうとか、小峯公園だとか色々語り傳へられてゐるに過ぎません。お城と云つても今私達が考へるやうな立派な築城でなく、たゞ壕を堀り土手を廻し柵を立てた位の物かと想像されるのです。北條氏になつて今の小田原城は今の地を占め、近世的の築城をなし、度々補修擴張されて關東の名城となり、城下町は非常な發達をしたのでした。因に大森頼明、頼春、氏頼の墓は總世寺にあります。

後北條氏の居城時代



北條五代

1 新英雄 早雲

早雲は始め伊勢新九郎長氏とよばれました。彼は何處の

人で誰の子孫かといふ事は種々の説がありますが、伊勢平氏の一門關氏一族だといふ説が一番正しいとされてゐます。殆ど名もなき一浪人に過ぎませんでしたが大きな望を抱

いて勇ましく世に乗り出したのでした。少年の頃から獵、乗馬、水泳等の勇しい事が好きでその上謀も巧みだといふ風に英雄としての素質に恵まれてゐました。康正三年（紀元二一七年）弓矢修業に出ましたが其頃の關東の状況は關東の足利氏が古河、堀越と兩公方が分れて互に争ひ合ひそれに管領家の執事上杉氏も山内と扇谷の二家に分れて互に勢を争ひ、それ等がからみ合つて複雑な關係になつて關東は凡そ三十年間の争亂が始りました。この分裂した關東の様子を虎視眈々として窺つてゐたのが早雲なのでした。

駿河國今川氏親が姻戚關係がありましたのでそこに仕へました。當時今川家ではお家騒動が起つてゐましたので、その危機を巧妙に調停して、平和に治めたので手柄によつて駿河國富士郡の内に廣い領地を貰つて興國寺（沼津附近）の城に住み、一城主となりこゝに英雄としての第一歩を踏みだしました。四十四才の頃から十五年間は領地の政治に力を注ぎ、人心を收攬して基礎を築き、英氣を養ひ、隱然機會を待つてゐました。丁度隣の伊豆國の堀越御所で茶々丸が家督問題で人道に外れた事をして人心が動搖してゐるのに乗じ一溜りもなく彼を滅し、續いて三十日も経たない中に伊豆一圓を風靡してしまひ韮山城に移りました。この戦ひは親不孝の茶々丸を討つたのですからそれは義舉戦で

あるとも云はれますが、一方この活劇こそは北條氏出世の序幕そのものでした。

これまで室町幕府は秩序を保つてゐましたが、早雲によつて投ぜられた一石が計らずも大きな波紋となり、こゝに戦國時代の動亂はひき起されました。こゝに英雄豪傑の活躍の舞臺は到る所に開かれました。

沈滞し切つてゐた足利季世の日本より新たな活動へ、健全な輝き近世日本建設の爲め一度は攪乱せらるべき世代に對して、早雲はその推進力を與へたのでした。一見すれば伊豆と云ふ一小國を取つたに過ぎないのですが、これは諸大名へ、その活動力と發憤心を起させる動機となりました。

この國を取つた早雲は關東に入る手初として相模を狙ひました。此處には大森氏の小田原城があり、時の城主氏頼は文武智謀共に勝れた人であつたので流石の早雲も手出しが出来ず表面和睦して機會を待つてゐました。氏頼が死んで庸愚な弟藤頼が後を嗣ぎますと、早雲は或時使を出して申しますには、「自分の所の山で鹿狩りをしましたら鹿が御領内の箱根山へ逃げ込んだらしゆうございますからどうぞ勢子（獵の時獸を追ひ出す人）を恐れ入りますがあなたの御領内に入れる事を御許し下さいませんか」と。

謀とは露知らぬ藤頼は「お安い御用です」とすぐ許しました。早雲は大喜び早速武勇の勝れた若者數百人を選び勢子にし、又物馴れた者數百人を犬引に形を變へ、竹鐙を持たせ、夜討の支度をさせて追ひ／＼石橋や湯本の邊に隠して置きました。時が來ますと早雲は千頭の牛に角毎に松明

を結びつけて、箱根の山に追ひ上げて石橋の邊から法螺貝を吹いて関を作り、板橋の町屋に火をつけました。小田原城では夜陰に響く法螺貝の聲に驚いて見ますと山々には赤々と松明が燃え盛り、板橋の方まで炎々と燃え上つてゐるのでその驚いた事、敵は何十萬かと周章てふためきました。しかも小田原方は運がつきてゐたのか、上杉合戦の加勢に軍兵は外にあり、城には少しより居りませんでした。勇敢に戦ひました。

早雲は流石の勇將、軍の第一線に進み大奮戦、遂に敵は一度も返へさず城を落ちて行きます。それを追つて早雲はそのまゝ小田原城を乗取つてしまひました。そして人をやつて守らせました。時に明應四年（紀元二五五年）（鎌倉管領九代記の説。鎌倉九代記小田原記には明應三年とす）早雲六十四の時でありこの年早雲は初めて北條氏を名乗りました。理由については色々云はれてゐますが、韮山に移つてから早雲は終世こゝを根據地とし又自分の發祥地とし

て居たものでせう。そして韮山は鎌倉幕府の執權北條氏が蹴起した所ですから長氏は其の跡を嗣いだ意味で北條氏を名乗つたものでありませう。

かくて彼は北條泰時、時頼の善政と武勳とを追想しながら自分も大いに努力し様と決心をした事と思はれます。こゝに早雲の大きな望と深い徳がしのべれます。

後世の歴史家は鎌倉時代の北條氏と區別するために「後北條氏」「小田原北條」「伊勢北條」「五代北條」等と呼んでゐます。

小田原を取つた早雲は直ちに甲斐に打ち入り武田氏と和睦しましたので、これからは武田氏も容易に挑戦する事なく、小田原は完全に早雲の支配下に置かれたのでした。相模の豪族の多くは次第に來り屬しましたが、獨り三浦郡を領する三浦義同（入道道寸）は文武二道に勝れた名將でその子義意また八十五人力といはれた程の勇者、お城は要害堅固然も部下の者にも篤く信服されてゐたので城を守つて容易に早雲に屈服しなかつたのです。

江戸の上杉氏を討つといふ大望を持つてゐる早雲は、その途中の邪魔になる此の三浦一族をどうしても亡ぼさんものと、物凄い激戦が行はれましたが三浦氏も上杉氏の掩護のもとに新井城（東京帝大臨海實驗所附近）を死守し勢な

か、強いので早雲は悠然と持久戦の策をたて、三年の後終に三浦方は糧食盡きて永正十三年（紀元二一七六年）陥りました。この年早雲が宿願成就した奉養に三島神社へ刀と願文を奉納したのでありますが、今それが同社に残り彼の當年の喜びを物語つてゐます。かくて彼は三崎に城を築き、いよく關東に向つて勇躍兵を進め様としましたが不幸永正十六年八月この快男兒は葦山で此の世を逝つたのであります。時に八十八才、遺言によつて早雲寺に葬られました。

早雲は名も無き武士から志を起して戦國群雄勃興の先驅をなし、伊豆、相模を略して北條五代の基礎を築きあげた天才的な英雄であり、戰略家としての早雲はかなり詭計を用ゐてゐますが「朝倉宗滴話記」に早雲の人格を評して「伊勢早雲は針を倉に積むべき程の蓄仕候つる雖然武者邊につかふ事は玉をも砕きつべう見えたる人にて候由………」とあります。つまり針のやうな小さな物でも藏に積んで置く位の細心の人ですが、いざ戦となるとどんな立派な物でも惜みなく使つてしまふといふ位の大膽さがあり、こんな所にも武將としての早雲の面目が躍如としてゐるのではないでせうか。然し私達は戰略家としての彼の反面に、否、眞に彼を立派な英雄たらしめた一つとして、彼が名領

主として如何なる善政を行つたかに就き一瞥を興へたいと思ひます。この時代には租税が大變苛酷な時でしたが、之を寛大にして民の爲めを圖り、又いろ／＼便宜を興へましたので隣國の人民ですら北條氏についた程であり、この點彼は又寛猛兩側面の人と云ひ得るでせう。この志をついだ子の氏綱、孫の氏康は又一倍政治に力を盡し東日本に於ける大勢力を形成することになりました。又早雲は學問にも熱心でした。學者を招聘して「六韜三略」（支那の昔の兵書）の講義に耳を傾けたり、或は「太平記」を研究したり或は又「吾妻鏡」（鎌倉幕府の日記で武家政治の規範とすべきもの）を愛蔵したことや、「文選」等を人に興へた事などから推して彼は此等も讀んだものと想像され得るのであります。

早雲の二十一ヶ條にも學問の事が四ヶ條も規定してありますから、文を學ぶのは北條氏の家憲であつたのです。絶えず戰場を馳驅し、大軍を叱咤する忙中にも學問を怠らなかつた事が窺はれ、こゝに彼の人となりの半面にその奥床しさが偲ばれるではありませんか。

其の家法には「少しの暇でも利用して常に本を離さず勉強するやうに」と書いてあり、それは四百年後の今日然も同じこの小田原

の地で學問の道にいそしんでゐる私達にとつても眞に生きた教訓ではございませんか。

早雲の廿一箇條といふのは早雲のつくつた法律であり家訓であつて、これで以て早雲の人爲が分り又家風も窺ふ事が出来ます。信仰、學問、道徳、日常生活の小さな事に到るまで細かく書いてあり、云はば武士の心得、作法を示したもので、實踐的の教訓であります。この廿一箇條は北條氏の全盛の頃から江戸時代の初期まで關東の子供達は皆之をお習字の手本としたと云はれてゐます。武士の訓が實行を主材としたことが、これらの家訓に依つて察知されるのであります。時代こそ異なれ私達の修身の御本としても教へられる何物かが得られるのです。皆さんよく味つて下さい。

早雲の廿一箇條（抜文）

- 一、第一神佛を信じ申へき事。
- 二、朝はいかにもはやく起べし。遅く起ぬれば。召仕ふ者まで油断しつかはれず。公私の用をかくなり。はたしは必主君にみかざられ申べしと。ふかくつゝしむべし。

- 一、ゆふべには。五ツ（今の午後八時）以前に寝しづまるべし。夜盜は必子丑の刻に忍び入者也。宵に無用の長難談。子丑（午前十二時、二時）にねいり。家財をとられ損亡す。外聞しかるべからず。宵にいたづらに。焼すつる薪灯をとりをき。寅（今の午前四時）の刻に起。行水拜みし。身の行儀をとゝのへ。其日の用所。妻子公司來の者共に申付。扱六ツ以前に出仕申べし。古語には子にふし寅に起よと候得どもそれは人により候すべし。寅に起て得分有べし。辰巳（今の午前八時、十時）の刻迄臥ては。主君の出仕奉公もならず。又自分の用所をもかく。何の謂かあらむ。日果むなしかるべし。
- 一、（前略）水はありものなればとて。たゞうがひ捨べからず。（後略）

- 一、拜みをする事。身のおこなひ也。只こゝろを直にやはらかに持。正直憲法にして。上たるをば敬ひ。下たるをばあはれみあるをばあるとし。なきをばなきとしありのまゝなる心持。佛意冥慮にもかなふと見へたり。たとひいのらずとも。此心持あらば。神明の加護有之べし。いのるとも心まがらば。天道にはなされ申さんとつゝしむべし。
- 一、刀衣裳。人のごとく結構に有べしと思ふべからず。見

ぐるしくなくばと心得て。なき物をかりもとめ。無力
かさなりなば他人のあざけり成べし。

一、出仕の時は申に及ず或は少き煩所用在之。今日は宿所
にあるべしとおもふとも。髪をばはやくゆふべし。は
ふけたる体にて。人々にみゆる事。慮外又つたなきこ
ろ也。我身に油断がちなれば。召仕ふ者までも其振
舞程に嗜むべし。同たけの人の尋來るにも。とつき
まはりて見ぐるしき事也。

一、少の隙あらば。物の本をば文字のある物を懐に入常に
人目を忍びみべし。寝てもさめても手馴ざれば文字忘
るゝなり。書こと又同事。

一、上下萬民に對し。一言半句にても虚言を申べからず。
かりそめにも有のまゝたるべし。そらことを言つくれ
ば。くせになりてせゝらるゝ也。人に頼りみかぎらる
べし。人に糺され申ては。一耻と心得べきなり。

一、歌道なき人は無手に賤き事なり。學ぶべし。常の出言
に慎み有べし。一言にても人の胸中しらるゝ者也。

一、奉公のすきには馬を乗ならふべし。下地を達者に乘
らひて。用のたづな以下は稽古すべき也。

一、よき友をもとめべきは手習學文の友也。悪友をのぞく
べきは。碁將棋笛尺八の友也。是はしらすとも恥には

ならず。習てもあしき事にはならず。但いたづらに光
陰を送らんよりはと也。人の善惡みな友によるといふ
こと也。三人行時かならずわが師あり。其善者を撰て
是にしたがふ。其よからざる者をば。是をあらたむべ
し。

一、ゆふべには。裏所中居の火の廻り。我とみまはり。か
たく申付。其外類火の用心を。くせになして。毎夜申
付べし。女房は高きも賤も。左様の心持なく。家財衣
裳を取ちらし。油断多きこと也。人を召仕候共。萬事
を人に計申付べきとおもはず。我と手づからして様体
をしり。後には人にさするもよき心得べき也。

一、文武弓馬の道は常なり。記すに及ばず。文を左にし武
を右する古の法。兼て備へずんば有べからず。

2 氏綱の敬神と豪毅

伊豆に蹶起し、文字通り單身孤行相模を掌中に收めまし
た早雲は、北條氏創業の偉人として大いに昂揚さるべきで
ありませうが、さて二代氏綱は守成また向上の人として如
何なる使命を負ふたのでありませうか。北條繪卷のノイル
ムはいよゝ第二巻に入つて参ります。

二代氏綱は幼名を千代丸と云ひ、父の遺志を繼ぎ第二の
活動の推進を始めたのでした。彼また明君勇將でありまし
て、父に倣つて善政に力を盡しました。豪傑の士や義士を
重んじ、又孝悌を大本とし、忠臣烈婦の事を聞いては非常
に感動し、奨励して常に政治に力を入れました。従つて家
來達はこの有難い主君の爲には本當に忠義を盡さなくては
といふ心が日毎に強まり、他領の軍勢でさへ北條氏の下に
來服する者非常に多く、益々勢が盛んになりました。大永
四年（紀元二一八四年）丁度江戸城主上杉朝興の家來が内
應して來ましたのでこれと戦ひ、江戸城を占領してしまひ
ました。大永六年丁度海を隔て、北條の向側に勢を振つて
りました安房の守護人里見義弘が、數百艘の兵船を用意し
て鎌倉に押渡り、佛閣を壊し鶴岡の寶藏を破却したりし、
寶物を奪ひ取る等亂暴をするといふ事を聞き「我國は神國
である。殊に里見は八幡宮の氏人だから奇進をすべき筈な
のに、それどころか神罰も顧みずこんな事をするとは前代
未聞の惡逆だ、この様な惡人は皆召し取つて惡習を懲しめ
よ」と云つたので、伊豆、相模の血氣の若者は吾先にと集
り鎌倉に向つて出發、一人も残らず討つてしまひました。

此の頃より此の兩家の戦は幾度となく繰返へされましたが
多くは此の時代に珍らしい海戦許りであつたことは注目す

べきこととせう。次に上杉朝定の河越城を落し、扇谷家を
殆ど武藏から追ひ出し、やがて天文六年鴻台の一戦で足利
義明を破り關八州に勢を振ひ、こゝに於いて北條氏に對抗
する者は關東ではなくなつてしまひました。そして下總、上
總の豪族まで進んでその支配を受けることになりました。
彼は敬神の念深くいろ／＼立願を果す爲又子孫の武運を
も祈る爲に鶴岡八幡宮を建立致しました。それは頼朝が建
立してから近頃戰亂が絶えず修造もされなかつたので社殿
も多く朽ち果てゝゐりました。それで氏綱は神宮寺、若宮辨
才天社、白旗下神、鐘樓惣門、朱の玉垣、石橋を初めとし
て百八十間の廊下に至るまで、金銀をちりばめ素晴しく立
派に再興いたしました。別にこの爲に民に心配かけるでも
なく、國家の費用を煩はす譯でなく、やす／＼とこの様な
立派な宮が落成し、八幡の神威と共に彼れ氏綱の武威も日
に月に輝くことになりました。またかの箱根權現の現社殿
の如きも氏綱の建立によるものであり、又大永四年足柄下
郡にある神山神社の社殿を復舊して其の祈願所としたが如
き、これらの事實はよく氏綱の敬神の念に篤かつたことを
物語るに十分ではありませんか。

天文十年（紀元二二〇一年）北條氏の地盤を固めた氏綱
は一門の歎きの中に歿し早雲寺で一片の烟となりました。

小田原が非常に繁昌して天下の小田原とまで言はれるやうになつたのは、實に氏綱、氏康の時代でした。畿内や西國の商人や職人まで小田原に移り住むもの益々多く、外郎の先祖が京都から来たのもこの時でした。

3 氏康の人格

北條繪卷のフィルムも只今から愈々第三卷目のクライマックスには入るのです。

學問文學の愛好者として、また戦術家として、北條五代の中一番傑出したのは今から描き出さんとする氏康その人でありませう。

戦國時代の代表的な名将上杉謙信と武田信玄の顔合せである川中島の戦は皆さんもよく知つてゐますが、この天下の二名將を相手として一步も譲らなかつた氏康の事蹟こそは又北條氏中の華でなくて何でありませう。彼は亂世の英雄であり治世の明君でしたが、國王丸と呼ばれた少年の頃は弱虫で笑はれた位でしたが、大いに修養錬磨を積んで名君になつたのでした。十六才の時父に遺はされ初陣姿勇しく武州府中まで出陣、大軍の上杉朝興軍を散々に負して凱戦しました。山内家の憲政、扇谷家の朝定、古河公方晴氏

を去り時には士卒に代つてその勞をとりこれを勞つてやりました。彼は其の政をとるや領民をよく愛撫し、戦に臨んでは機敏で用兵また縦横自在でありました。彼は又學問を好み書を尊び、専ら古書の保存に努め、金澤文庫の藏本を閲覽した行爲は、殺伐な戦國時代に他の群雄には眞似も出来ない點で、西の文化都市山口の大内氏等と共に注目せらるべきでありませう。殊に彼が劍戟と陣馬の響に明け暮れる間にも常に歌道に心をよせ、連歌師宗牧を三度も城中に招いたり、或はまた自ら「武藏野紀行」を著して、其の藝術的天分を表はしたことは、眞にプロシヤのフレデリック大王にも比すべき優しき文武兼備の名將でありました。教育にも熱心で足利學校の校主（校長に當る）九華が年六十一になつたので辭職して歸郷しようとして小田原を通つた時、彼は一子氏政と共に三署の講義を聞き、學徳の勝れた人は他にないからと「宋版の文選」といふ本を贈つて懇ろに止めて再び足利學校に住せしむることにしました。此の文選は現在に至るまで同校に存してゐます。徳川の御書物奉行近藤守重が曾つてこれを視て「北條氏の人材を愛し學校を推擧」する「美意」も見るべきであると賛してゐるのであります。痛くこれに感じた九華は、在校三十年、弟子三千人、一生を教育の爲に盡しました。戦國の血

が同盟し、更に駿河今川義元と結んで天文十四年（紀元二二〇五年）九日大舉八萬の大軍を以て河越城守將は北條軍を圍みました。翌年氏康は僅か八千の兵を以て小田原より進軍、その十倍の兵を向ふに廻はしたのであります。氏康の深謀と部下の勇敢な働きとで散々に切りまくり、奮撃突戦それこそ一人が百人にも當り、一夜の中に上杉勢を驅つて松山城も奪ひました。その中に彼に降つたもの關東の豪族だけでも九十余人に及んだとか。武藏の國では獨り岩槻城の太田資正（道灌の曾孫で入道三樂のこと）をのぞいて皆降つたのです。ついで上杉憲政を上野の平井城に攻めて彼を越後に走らせたのであります。山内上杉氏もこゝに滅亡することになりました。河越の戦に朝定が討死して扇谷家が亡んでゐますからこゝで上杉氏が關東管領の執事になつてから凡そ二百余年で全く亡びてしまつたわけですね。又天文二十三年（紀元二二一四年）には古河城を攻め落し、古河公方晴氏を波多野（今の秦野）に押し込め、其後上杉謙信、安房の里見義弘、武田信玄等と戦ひましたが殆ど常に戦ひに負けた事はありませんでした。氏康の時の領土は伊豆、相模、駿河半國、上野半國、下野半國、上總半國等に亘り廣漠たる關東平野を領有したのでした。信玄謙信、信長と共に眞の名將と言ふ事が出來ます。彼は私慾

腥き時世に關東の足利學校は一時京都に代り、全國學問の中心となつたのは九華の力であり、氏康の保護によるものでした。

天文十二年鐵砲が初めて種子ヶ島に傳へられたのを知り氏康は泉州堺から國康といふ鐵砲鍛冶を招いてこれを造らせました。その爲小田原には鍛冶屋が多く、天正の籠城の時にも鐵砲が多かつたのです。彼は四十六才で隱居し、五十七才で歿しました。天文十年（紀元二二四二年）あの天下の名將上杉謙信、武田信玄さへも小田原はどうする事も出來なかつたのです。

謙信の小田原包圍攻め

永祿四年（紀元二二二一年）三月上杉謙信が九萬六千餘騎を率ゐて小田原へ發向しました。これは先年養父憲政が氏康に負けたので上州を落してその恥を雪ぐためだと表面は披露してゐました。事實は謙信が上杉となり管領になつたので、今までの管領の習慣に従つて鎌倉の若宮に拜賀する爲でした。鎌倉に近い小田原退治と稱し入勢を集めて押寄せ北條氏と對陣し、若し小田原から兵を向けてよこしたら合戦をする事とし、若し小田原が手出をしないで籠城

したらこれを攻めないで通り過ぎて若宮に参詣をしようと密談し、いよ／＼小田原にさしかかりました。小田原ではさては由々しき一大事といろ／＼評定しました。城を出て大磯小磯の方まで兵を進め敵を攻めようか、それとも敵を取籠めて壊滅させようか等議論まち／＼でした。その時氏康は老中の者を召し出して自分の戦畧を授けて申しますには「彼の景虎は天性健かな若者で血氣盛んだから立腹すれば爰の中にも飛入る事も何とも思はないし、鬼でも掴みひしがうと云ふ程の短氣な勇者だが少し時間がたつとその勇氣が醒めて、何事も靜かに思慮する様になると云ふ風があると聞く(中略)其の上彼は多勢だからこちらは人數を出さずに籠城して彼の血氣を醒して、熱がさめ糧食が缺乏した所を狙つて討たう」と、この様に電光石火に敵陣に斬り込む謙信を短氣な勇者となし、血氣にはやつて急激に攻めて来るのを冷靜に待ち、その勇氣に疲れの出る頃を見計らひ逆襲する計畫を立て、これを實行しました。籠城軍には糧食が十分なのです。それは常に父祖以來政治に注意し、市内の庶民の支配の宜しきを得た御蔭でありました。さて家來をして敵状態を偵察せしめると、案の定景虎は甲を脱いで下部に持たせ、頭を白布で包んで黒馬に乗り、諸所の陣に乗り込んで指揮をして居ました。その様子は恰も自身

の勇氣が人に勝れ、武謀にも優れてゐるのを見せようとした様に見えました。さすがに氏康、謙信の長所も短所もよくみてゐます。こんな時争へば龍虎の戦になり、景虎を例ひ討つたとしても、味方も兵士を大半失つてしまふに違ひありません。そこで五十日ばかり對陣してゐますと、謙信方は長途の長陣に兵糧がつかまりました。それを見澄して小田原から潜かに人衆を出して夜毎に謙信方の小屋を所々焼き拂ひ、或は彼の輜重を奪つたりしました。一方謙信方では家來まで彼に叛いて部下の兵を引き連れて去る者も出て手勢も少くなり、流石の謙信も敵し難いと思つたのか小田原表から軍を引いて鎌倉鶴ヶ岡八幡宮に参詣し、小田原から攻められぬ間にと上州へ倉皇と逃げ歸りました。籠城軍に食糧が足り、攻撃軍に食糧を缺乏させるといふ逆を行く戰術は氏康獨特のもので、こゝに私達は謙信以上のものを認めるのであります。

永祿六年には第二回の鴻の台の戦で勝を占め、その勢で上州諸城を陥し勢がつよかつたのです。

永祿十年には謙信は北條氏を屈服させるのが困難であると考へ氏康の子を養子として遂には北條方と和睦してしまひました。

信玄の小田原襲來

信玄は長驅小田原に攻め來つて一大決戦を求め陣形を二手に分け、東は江戸、北は八王子の方より北條を一潰にしてくれんと勇しく進軍しました。小田原では軍の評定し、松田入道は先年輝虎を追ひ拂つた例をとり籠城説を唱へ、「甲州勢が長途の長陣に兵糧つき退く事疑ひなし」と云ひ、遂にこの作戰に衆議一決、町人に至るまで悉く城に入れ、遠い所は皆曾我山・田嶋・河村と思ひ／＼に入れて少しも動かなかつたので信玄は何等の抵抗も受けず蓮池門(場所不明)まで攻め入り民屋を少々焼きましたが、徵集すべき兵糧もなく、困り切つてゐる所を北條方は足輕を出してちよつと合戦さし城に戻らせました。信玄は二日在陣して食糧缺乏し、夜中に少數の人を風まつり、湯本邊にかはして民屋を少々焼かせ、それをいゝ潮時としてまりこ川を渡り飯泉で人數を集め夜間に大磯、平塚、八幡を過ぎ石増峠まで引き退いた。これを聞いた北條軍の一部は大はやりにはやつて押寄せました。信玄が三増峠に要害を堅め、人衆を備へた所に小田原衆がめき叫んで攻めかけました。甲州勢は最前線に於いて敗戦つゞき、將士多く戦歿いたしました。この由が早飛脚を以て小田原に告げられ、氏康父

子は自ら二萬余騎を率ゐる直に出陣。信玄は山の上に隠した兵を以て二手に分け、忽然森の蔭から突撃させますと、小田原勢は不意を喰つて散々に破られ、士卒多く仆れました。その時既に氏康父子は三里此方へ馳せ着きましたが敵は勝つて甲の緒をしめて出合はず、小田原の蒲原の城が手薄だとき、信玄はこの城に攻圍の体制をとりました。この城には北條三郎が籠つて居り、小勢でしたが力戰奮闘、信玄方の近臣を初め多く討ち取りましたが、不幸城中内應者が出て甲州勢を引き入れましたので、大將以下本城に歸へり憐れ一人も残らず城を枕に切死いたしました。信玄は一氣に駿河に押し迫り、府中の館の人を十増倍の立身をさすと云つて味方に入れ、それを先手にして花澤の城の攻略にかゝりました。これは陥落しなかつたのですが、一方小田原方に又謀反者があつて、信玄と連絡をとつたので遂に藤枝の城も落ちました。

其の後氏康の死後信玄から氏政に和談して來ました。げに籠城主義は小田原方の慣用策で、かくして北條氏は多く戦はずして甲越の二雄を制したので、さしもの二雄も北條氏に對して如何とも施すべき手がなかつたのです。

元龜元年十月三日年五十六才でこの一代の名將氏康は軍事多難の秋一門家來の人々の歎きの中に病死しました。衆

皆父母との別れの如く愛惜して動哭したのでした。

4 氏政と小田原城の最後

四代氏政は少年の時から父に伴はれて屢々諸處の戰場に臨みました。名將氏康の仕込みだけあつて、武勇にかけては勝れた技倆を持ち、十八才で上野、下野に戦ひ戦功がありました。その資質は寧ろいつ迄も坊ちゃん育ちであつたと云はれてゐます。永祿三年家を繼いだ後も軍國の機務は父氏康によつて決せられてゐました。永祿五年父に従つて松山城を落し、翌年はやはり父と共に里見義弘を鴻の台に破り、十一年には同じく父と共に信玄と戦ひ、武田方の諸城を破つて駿河側に於ける勢力を恢復したりしました。

元龜元年には駿河方面から軍を歸して來た信玄勢に對し氏政は兵を督して箱根で喰ひ止めてその先鋒を破り、敵を追うて三島まで陣地を進めました。そして翌年信玄と和議を結び、一方北の方佐竹義重を破つて常陸四郡を手に入れ、天正元年には佐竹を下總宿に擊破してその城を手に入れました。

これより先元龜三年に長子氏直に家を譲り、政務を後見しました。

天正十年に徳川家康と若神子で戦ひましたが、捷利を得る事少かつた爲媾和し、氏政、家康は黄瀬川に會見して兄弟の好みを結ぶ事を約し、家康の女を氏直に娶りました。天正十八年小田原開城の運命となり、城を出て田安齋の家で弟氏照と共に立派な辭世の歌を残して、從容として死につきました。

あま雲のおほへる月も胸の霧も

はらひにけりな秋の夕風

我身いまきゆるといかに思ふべき

そらよりきたり空にかへれば

さすがに父氏康の薫陶をうけ、關東に雄飛した武將として恥ぢない立派な最期でした。この世の執着を脱しきつた美しい悟りの境地ではありませんか。

5 氏直と北條氏の末路

元龜三年に年若くして家を繼ぎ、父氏政と共に國を經營してゐました。攻城野戦に暇のなかつた北條氏も氏直の時代に至つて小康を得ましたので、外に争ふよりも寧ろ守つてゐる様な有様でした。

秀吉が小田原に攻めて來るといふ事を聞いて城を修造しそれに備へましたが、遂に作戦を誤り一敗地に塗れて七月

開城の止むなきに至りましたが、彼は家康と特別關係ある處から特に死を赦されて高野山に入る事となりました。この時氏規、氏勝を始め近臣三十人が隨行したのです。其の時の秀吉方の取扱は頗る鄭重で、一同も感激に咽んだと申します。翌年南河内天野の興應寺に移され後大阪に迎へられ三十表をうけて厚遇されましたが、痲瘡に罹り天正十九年十二月四日三十才で歿しました。こゝに北條の宗家は斷絶してしまつたのでしたが、前述の如く氏規がこの跡を繼ぎ子孫は連綿として今日に到つてゐるのであります。

氏直の人物は猜疑心深く、決斷力が無かつたと云はれてゐます。小田原籠城の際も氏直に決斷力なき爲群臣を評議させましたが、空しく座談ばかりで遂に棄城したと云はれてゐます。

小田原戦役

1 小田原籠城の死守と包圍軍

北條繪卷のフィルムも愈々壯烈なる光彩を以て小田原史

の結末を飾る秀吉の大攻城陣の展開となつて参ります。

小田原籠城は秀吉の天下統一の最後の戦ひの抵抗でした。しかも秀吉はこの一戦に對しては實に慎重な態度をとつて非常に重大視してゐました。秀吉の一生にとつてこれ程心を用的大規模に準備をととのへて兵を出した事は大陸への活動は別として、國內に於いて他に例を見ませんでした。例ひ運悪く破れたとは云へ、これは北條氏にとつて絶大の誇ではありませんか。それは秀吉の小田原征伐と九州征伐とを比較することによつて明瞭になります。

九州征伐は天正十五年（紀元二二四七年）で小田原征伐より三年前でした。破竹の勢で九州を席捲せんとしてゐた島津氏に對する秀吉の見方を見ますと、

「彼の薩摩の臆病者には太刀もかたなもいりませんから追付追ひ廻し城々を取巻き申ませう」（前後略）と黒田勘解由と云ふ人に手紙を與へてゐます。

この追付追ひ廻すといふのは直ちに攻撃が出来るといふ事で、さしもの島津も秀吉の眼中には殆どなかつた様に見えます。これに反して小田原に對しては再三再四平和の交渉を試みて一歩も二歩も北條に譲つて上洛服従する事を勸告しましたが、北條氏は陽に平和を装ひ陰に戦備を整へ、終に秀吉の要求に應じませんでしたので、秀吉は意を決し

て征討の師を發する事になり、莊重且つ堂々たる書狀を以て宣戰布告をしたのでした。そして全力を小田原攻撃に注ぎ、それこそ大規模のお城を石垣山に築いたのでした。そのお城の有様はすこぶる大仕掛けなものでした。

榊原康政が陣中より加藤清正に送つた書狀に石垣山の事が書いてあります。それによりますと、箱根連山の北條氏のお城を真下に見下される山上に天主矢倉の白壁は天に輝き、陣屋は總べて完備し、その上、松竹草花野菜穀物まで作り道々に植木を植ゑ書院數奇屋まで備へ、大道には朝から晩まで軍馬の足音物具の聲しげく堂々たるものでした。日本全國から商人が集り來て國々の名物、津々浦々の魚肴、唐土高麗の珍物、京都邊の絹布と無いものなく、兵糧は千石二千石の大船が一万余艘で絶間なく運送され、娛樂機關まで整備して、この陣地で一生を送つても退屈しないと述懐してゐます。よく長陣用意の狀況が想像されるではありませんか。何故秀吉程の人が北條氏にのみかゝる態度で臨んだのでせうか。それには幾多の理由があるのです。即ち北條氏は五代の積威と富力を蓄へて關八州に力強き地盤を造つてゐた事、小田原城が要害堅固な事、小田原が關東、奥羽の首腦となつて、その勝敗が當時天下の大勢を左右すべき重大なものであつた事、又小田原は長籠城の用意を十分に

してゐた事、幾度びも籠城戦で成功した経験のある事等でした。

小田原籠城の有様は、「廣大な事は西は富士と小嶺山つづき、二の山の間に三重堀をほり、小嶺山を城中に入れ、早川の河をかたどりの、南の濱へ堀をまはし石垣を築き、東北は沼田堀をほり築地をつくり、東西へ五町南北へ七十町廻りは五里四方、せいろう矢倉隙間もなく立をき、堀さかもきを引せ、大將家々のはたをなびかし、馬の標差物色々様々に有て、風にひるがへすよそほひ吉野立田の花紅葉にやたとへん……」とある様に武備は整へ糧食は十分に貯へ、又長陣にも退屈なきやう將棋、雙六の遊び、酒宴、遊舞、茶湯、詩歌、連歌をなし音楽に興じたり等の出来る用意も萬端そろへ、諸侍は木を枕とし甲冑をしとねとし、役所の者共は弓鐵砲を陳も無くはなつ様にし、其他の者には娛樂で退屈を凌がせ、十分の用意が出来てゐました。かくて氏政は父祖以來五代關東盟主の名譽と誇りに確信を持ち天下の英雄秀吉を一時なりとも憂慮せしめたことは、その勝敗は別として、關東武士の面目を保たうとした勇氣は稱賛に値するものがあります。

2 氏政と關東武士の心

北條氏は秀吉に上洛をすゝめられた時に次の様な事を云つてゐます。

「勅命であるなら參内致しませうが、さうでなく關東を望む方は誰でもかまひません、武勇を以てお取りなさい。お互に勝負を決し運を天に任せませう。……(中略)此上は上洛するに及びません」と、それは運命を賭して雌雄を決せんとした壯絶快絶な豪語ではありませんか。實に關東武士の氣骨を遺憾なく表はした有聲の好文字ではないでせうか。悪く言へば秀吉の力を知らなかつたとも云ひますか。

小田原籠城は北條氏の老臣である松田尾張入道が謀反の下心があつたので、籠城説を主張したと「北條記」に書いてありますが、そんな簡單な事ではなかつたものでせう。北條氏は籠城によつて謙信も信玄も已むなく引揚げさせた經驗をもち、秀吉の時もこの計畫によつて小田原城に關東の精銳を集めて用意周到を極めてゐましたが、秀吉はそれ以上に無限の兵力と長月日にたへる糧食がありますので、北條氏の目算は外れ、終に開城の已むなきに至つたのです。

初め北條氏が秀吉の東下する事を聞き、管内の諸國に命じて百姓、町人を問はず軍隊に加はしめる様にしましたら大勢の百姓、町人、僧侶、神主に至るまで加つて、身命を捨て、戦つてくれました。關東は全く總動員の体制下にあつたのですが何といふ力強いことではありませんか。これは北條氏の領國が隅から隅まで上下一致してゐた事を語るもので、他の諸國には殆ど例を見ない美談なのです。これも早雲が政治に力を盡し、代々それを繼承した精神の表はれなのです。たゞ不幸な事には松田尾張守が謀叛した事ですが、この外には殆ど無く、たゞ二三の叛者はありましたがそれは形勢の悪いのを見て秀吉軍に通じたので、初めから謀叛の企てのあつたのはこの松田だけで、此の點又一族老臣に叛かれ孤立した武田氏の末路とは同日の談ではありません。

小田原が開城となつて氏直が死を許され高野山に趣いて出家しようとした時、彼に従ふ事を志願する節義の士の多かつたこと等の事實に、私達は北條氏五世の間に育成され來つたその士風を偲び得るではありませんか。

氏政、秀吉の兩軍の兵力を見ますと、秀吉軍の勢力圈内の地は九州、四國、中國、近畿、中部、奥羽の西の一部(越後、佐渡、出羽の一部)それに常陸、下野の一部も直接

ではありませんが秀吉に聲援してゐます。一萬石から兵二百五十人出すとすれば秀吉軍は四十一萬二千人、北條軍は關東の大部で七萬一千余人、秀吉軍は二月いよく家康をはじめ羽柴秀次等相次いで出發、海軍も同じく二月長曾我部元親はじめ各々大軍を率ゐて港灣を出帆、三月一日には秀吉節刀を受けて出發、二十八日には長久保城で家康といろ／＼作戦計畫をして諸將の部所を定めました。

北條軍は十七年には海道要害である中山城を修築し規模を大きくし、山田次郎左衛門以下十四人に命じて巨銃二十挺をつくらせたりして着々用意し、十八年には小田原城内外を修築擴大し、足柄城も修築し、兵器を農工商をとはず豫め備へさせて軍に會させるやうにし、正月二十日には各將を小田原城に集めて軍議をねりました。北條氏邦が進み出て云ふには「老公が小田原の本陣を守り、守將は軍を率ゐて先づ沼津城を取り、これを牙營（大勢の居る中心の城）として氏邦自身又は兄氏照が先鋒に立つて富士川に出戦しよう。又は牙營を三島に置き敵を黄瀬川に防ぐ事にしようか、この中の何かをとれば敵の長途の疲勞に乗ずる事になり、秀吉は進退に窮し、さうすれば徳川公必ず我々に有利の措置に出るだらう」と、諸將は大部分これに賛成しましたが松田憲秀のみは之に反對し「箱根の險は天下無比だが

らこれを守つて居れば敵は兵器食糧が缺乏し、士氣沮喪するだらうからこの時自分が追撃すれば秀吉を生擒にする事も出来る。だから何を苦しんで出戦する必要があらうか」と云ひました。一、二異議はありましたが、大勢はこの説にきまり宮城野、片浦、湯本を氏照、憲秀が守り（この三所は山中、葦山に次ぐ要地）山中には松田康長、其他葦山は氏規等が守る事に決定しました。これを専門の作戦法から見ると最もまづい方法なのだそうです。戦は何れの時代何れの場合に於いても、攻勢作戦こそ動かすべからざる所の大原則であり、大鐵則でなければなりません。假令防禦して攻者を非常に苦める事はあつても、それは一時攻勢を挫いたといふ丈で戦に勝つたとは云はれず、敵をして戦意を喪失せしめることは困難なのです。北條氏は當時最も優勢な地位にあつた秀吉に、腕づくで雌雄を決せんとした大決心は意氣地のない者には決して出来ないことで實に見上げた態度です。この氣魄こそ日本武門の精神として、將亦或る意味に於いて尊い大和魂の發現として誇らしい感じさへしますが、たゞ松田の説に従つて消極的な策に出た事は惜しいことでした。

いよ／＼開戦になりますと、秀吉は家康とはかり軍勢を三隊に分ち、一隊は葦山城に、一隊は山中城に他の一隊は

直接に氏政父子を攻撃することにしました。要衝山中城は正面から秀次の軍に、又北方元山中の路から徳川、又南方の別軍の三方面から攻撃され守將松田直長、間宮康俊を始め配下の勇士何れも皆戦死して城遂に陥りこゝに於て小田原軍の前衛は全く破られたのであります。鷹巣城、宮城野の將卒もこれを聞きやはり小田原に撤退し、秀吉軍は直に小田原へ敵を追撃之を包圍することになりました。葦山城は小田原に入る咽喉を扼し、然も之を死守するに智仁勇兼備の北條氏規は守るに易く攻むるに難き無双の堅壘でありました。敵は四邊から攻撃したが、地の利と人の和とに據る氏規はよく防ぎ、福島正則の兵さへ頗る苦戦し、さすがの寄せ手もたじ／＼の態でありました。そこで秀吉は戦略を變へて、葦山城を封鎖して小田原と連絡をさせぬやう唯遠巻に圍むのみでありました。遂にこの城は八州の他の諸城が陥つた最後まで陥なかつたのですが、これ有形無形に北條方に大きな影響を與へたものであります。彼は秀吉に認められ、北條氏直逝去の後其の跡を襲ひ、今日北條子爵家として續いてをり、明治天皇の御代侍從職にあつた北條氏恭子は實に其の直系であります。

四月二日秀吉は湯本に諸將を招き、御馳走してこゝを本營として小田原包圍の部署を定め、大軍はそれ／＼陣を張

りました。氏政父子は諸門の防禦に留意して適宜に一族諸將を配置しました。秀吉の包圍は四月三日から始り五日には攻撃諸將の部署全く成り、海軍は海上から城を攻撃し、先を下田を降した長曾我部元親も來會し、艦を酒匂川に列ねて小田原城の一櫓を崩壊させました。また兩軍の大衝突を見ない中に城内で前述の如く松田憲秀は籠城を進め、一方私に秀吉に内通して人を遣はして本營を石垣山に置けば小田原が一目に見下せ勝つ事確かだと勧めました。秀吉大いに喜び、この絶好の地に直ぐさま城を築きました。これが有名な一夜城です。秀吉は長期攻撃の覺悟で陣中に淀君を招き、諸將にも妻を招かせ暢氣な包圍でした。五月雨が毎日々々降り續き何時止むとも見え、總陣何となく疲れ果てた様子を秀吉がほの聞き、唱歌をうたひ、舞ひをしたので上下の氣が浮きやかに新しく成つて、幾年経つとも屈託しないと云ふ元氣が出さうであります。また茶湯に興じたり、御酒宴して陽氣に遊んで諸將を慰めた事が「太閤記」十二卷に面白く出てゐます。又或時陣中で家康と信雄とが一緒になり、小田原に通じるといふデマが飛びますと、秀吉は近臣をほんの少し連れ、家康の所に行つて御馳走させ、更に家康を伴つて信雄の陣で飲んだので、皆の疑も一度にとけてしまつたと云ふ事もあります。秀吉の偉大さの

一端が表はれてゐて面白いお話です。

包圍軍がはか／＼しい戦争もしない中に、秀吉軍の別軍は松山、河越を降し松井田鉢形の城を降し、諸城みな多少の抵抗の後に降りましたが、石田三成が攻めた忍城は秀吉の故智を學んで水攻にしたに拘らず小田原落城後まで落ちませんでした。秀吉の小田原攻(天正十八年)伊達政宗が石垣山に來て秀吉に従ひました。十六日には松田憲秀が秀吉に内應した事が露はれ又成田氏長が降参の約束をした秘事が顯れ、次第に城中の衆心が離反して來る様に思はれ小田原滅亡の緒口が解れ出して來ました。二十二日たま／＼出丸篠曲輪の地江があつて、それに乘じた秀吉軍に城中の兵が夥しく殺され、秀吉の石垣山本陣も落成して昂然と城を俯瞰してゐますし、人心も次第に離反する様子が見えて來てゐる所に秀吉から和議を勧められました。それでもまだまだ頑張つて容易には降りませんでした。遂に七月五日氏直は出城して「我一命を致すにより、父氏政以下將士の死命を宥されたい」と願ひ出ました。其の志に感じた秀吉は却つて氏直を免じ氏政及び前弟氏照に死を命じました。二人とも北條氏の最後を飾る美しい往生でした。

氏照の辭世は

天地の清き中より生れきてもとのすがたに歸へるべき

給へ、いつかんせいしゆん(逸巖世俊)と後のよの又のちまで此かきつけを見る人念佛申たまへや、三十三年のくやう也

幼くて戦死した亡兒の冥福を涙ながらに祈りつゝ橋をかけ、なほ自分ばかりでなく後々の人までお念佛をしてもらひたいと願ふ母の心情が溢れてゐるではありませんか。

交通の不便な當時、かういふ橋梁の架設等は容易な事ではなかつたでせうが、公共的事業の功德によつて少しでも

なり

嗚呼北條五世一百年、八州を領して箱根の險を擁して天下に雄視した小田原城は、こゝに至つて閉城の止むなきに至つたのですが、秀吉の率ゐる天下の英雄豪傑を全部一手に引受けて四ヶ月の長きに互つて堂々と戦つたのは實に痛快で、小田原の大いなる誇であると言ふのに誰が抗辯するものがありませう。

3 秀吉軍方の一挿話

この小田原陣に勝利の喜びに輝く秀吉軍の中にも哀れなお話がひそんでゐます。堀尾金助は年僅に十八才で秀吉軍に従軍しましたが武運拙く戦死してしまひました。最愛の子を失つた母の悲歎はどんなであつたでせう。でこの母は遂にその子の三十三回忌に當る元和八年に追福の爲に架橋の工事を起して、その欄干の擬寶珠に供養の銘を彫みました。

てんしやう十八ねん二月十八日に、をだはらへの御ぢんほりをきん助と申十八になりたる子をたゞせてふためとも見ざるかなしさのあまりに、いま此はしをかける事、は、の身にはらくるいととなり、そくしんじやうぶつし

戸冥福を薦めようといふ信念から出たものでせう。この橋は今もなほ裁斷橋といつて熱田にあります。幾度橋は架け換へられても昔からの擬寶珠は長く／＼残されて、見る人毎に同情の涙を新に誘ふであります。銘にある逸巖世俊といふのは金助の法名で、父帶刀吉晴も亦その菩提を弔ふために、花園妙心寺内に一院を建立して法名の字をとつて後巖院と稱してその木像を祀つたといはれます。母の涙と共に父の愛もあはれではありませんか。

北條氏退城後の小田原

小田原城を乗取つた秀吉は、懸て城に入り論功行賞しました。家康がこの北條氏の舊領地關八州得ましたが、これは小田原陣に功績が著しかつた結果です。北條時代は關東政治の中樞であり、武力の根源であり、從て文明の中心であつた小田原は、徳川の時代になつてからは忽ちにして一箇の邊城に顛落することになりました。勿論箱根、足柄の險を扼し大海に臨んでゐて、江戸の關門の要地として軍事上非常に重要な所ですが、華やかなりし小田原にははやうら淋しき凋落の影がさし初め、それが有つ文明は次第に江

に移り、かくて小田原も城下町東海道の宿驛として取り残されることになりました。天正十八年八月家康が江戸に移るに及び、大久保忠世に小田原城を與へました。采地四萬石、其後五千石を加増されました。

大久保氏時代

【大久保氏系】



1 先懸の常將忠世

祖先は關白道兼五代の後胤で、下野國の住人宇都宮左衛門尉朝綱から出てゐるとされてゐます。朝綱から九代目の孫美濃將監泰藤は建武中興の時、官軍として皇軍に働いたのであります。彼は吉野時代戦亂の頃三河に移住し、その子孫が大久保と稱してゐました。弘治元年(紀元二二一五年)徳川軍に従つて尾張國蟹江の城を攻めた時、一族七

人が勇しくも先懸して高名を顯し、蟹江の城七本槍と呼ばはざされ、翌年家康が十五才で初めて大將となつて、三河國梅が坪の城を攻め更に廣瀬の城に向つた時も先懸し、これ以來大久保一族は常に徳川氏に隨つて先陣を承はらない事がない程な意氣でした。中でも一段と名を擧げたのは大久保忠世で、前述の戦争は勿論、度重なる戦争に何時も第一線に立つて目覺しい活躍を續け、家康からも絶對信用を得てゐました。天正二年家康大井の城を攻める時、忠世が

家康軍で奮戦する中家來が深手を負つたので、忠世は馬から飛び下りてその馬を譲りました。家來はすっかり恐縮し堅く辭退しました所、忠世は「では馬を捨てるよ」と云つてドン／＼行つてしまひました。後から追ひかけた敵に家來の一人が斬りつけましたので、忠世は引き返し敵三人を討ち取りました。家康は「剛將の下に弱兵なし」と忠世を賞美したと云ふ事で、忠世の部下を愛する心、武勇の程がよく分ります。

天正三年三河國長篠の城に武田勝頼が押寄せて來た時の忠世及び弟忠佐の健闘振りのあざやかさに、加勢に來てゐた織田信長がつく／＼感じて、「自分の手下には彼等兄弟の如き天晴な大剛の兵は居らぬ」と云ひ、又二人に向つて「この度の軍に利を得たのは専らお前達兄弟の働が拔群だつたからだ」と心からほめた程の勇者達でした。

大久保忠世は天正十八年の小田原陣には家康に従つて先陣となつて働き、又秀吉は忠世の陣屋に行つて、家康に向つて忠世に増する様に勧めましたので四萬石に封じました。ところが秀吉も別に五千石を増されました。又秀吉が石垣山の城に在陣した時、忠世を招いて「お前は徳川股肱の臣だから自分は主人家康にお前を小田原の要地に封じ箱根を副へて守らせよと勧め、結局四萬五千石與へさせた

のだ。かういふ風にお前を厚く賞したのだが、若し萬一徳川氏と自分が干戈を交へなければならなくなつたらお前はどちらにつくのか」と聞きますと、忠世は聲を高くして「殿下の恩賞は誠に重く有難うございますが私は代々徳川家の臣でございます。ですから若し戦争になりますれば徳川家についてどこまでも義を守らすにはをられません。其時は御油斷なさいますな、必ずその時は殿下の御命も私の掌中に握られることになりませうと存じます」と答へますと、秀吉は「勇しい翁だ」とほめてお酒を飲まし、金帛を與へられたと云ひますが、この事を以ても忠世の氣概の大きさが察せられるではありませんか。彼は又自分の子孫や家來に勇敢に戦はなければならぬこと、又兵糧のことに就き、殊に軍人は如何なる粗食をしても生産する農民に對して常に感謝の心を大將たる者は常に持つてゐなければならぬ事と誠めてゐる名將です。文祿三年(紀元二二五四年)六十三才で歿し、墓は大久保寺にあり大久保神社に祀られてゐます。中興の英主としてあがめられてゐます。あの有名な大久保彦左衛門はこの忠世の弟なのです。

2 忠隣と武士道の精華

忠世の子忠隣は小さい時から非常に潔白忠義の人でした。永祿十二年（紀元二二二九年）遠州掛川の城が落ちる時、天王山での合戦に忠隣は十七才でしたが、叔父さんの忠佐が敵を組み伏せて、忠隣に其の首を取つてお前の功名にせよと云ひますと、忠隣は「人の呉れた首を取つてどうしませう」と拒絶して、自分で敵の中に馳入り堂々と首を取りました。箕形原では兵士がちり／＼になつてしまつて、家康につく人もほんの少しになりますとその側を離れず、終ひには歩立^{カチダテ}ちで御供さへしました。忠隣は四萬五千石の殿様のお嗣子ですからそれを考へてごらん下さい。暫くするとお供の一人が敵から馬を奪つてそれに乗せました。

忠隣は十三才の年から家康に仕へ父忠世と共に度々軍功あり、その爲官祿も厚く執事職を握り、肩を並べる者もなほ程權威がありました。家康に非常に愛され、また殊に忠世の子としても覚えめでたく、父に劣らぬ忠義無類の人でした。本多佐渡守正信と二人將軍秀忠に附せられました。是が御老中の始で、二人共飛ぶ鳥も落す威勢でした。

父の歿後家督を繼ぎ、遺領を併せて小田原六萬五千石の城主になり十數年間全盛でしたが、慶長十九年（紀元二二七四年）幕命で耶蘇教を禁壓するために上洛しましたが、その間に忠隣は叛を謀つたと讒言されましたから堪りませ

んでも又無罪が明になるに違ひない。その時お前達の中の一人でも生き残つてゐて召出され、お草履をなほす御奉公でも仰付けられる事があれば、それで自分の無罪も直ちに證據がたち先祖後代までの言ひ譯が立つだらう。若もお前達皆死んでゐたなら後々思召直されてお召があつても罪のない證據が見えず、先祖の名が汚るゝ事になる。この事をよく辨へて自害などしてはいけません。自分に對してはこれ以上の供養はないのだから」とよく／＼云ひかかせてゐます。そして忠隣はその間靜かに謹慎して、つれづれのあまりに「忠臣記」二卷を作つたといふ事です。

天はこの忠臣を見捨てず、家康が内々調べて見ますと忠隣の罪の慥な事が判らなかつたので、忠隣の妻へ二百人扶持を與へ、子供達は二人だけ一時東北に配謫しました。忠隣は「御奉公もせず樂々と自分の領地にある事は恐れ多い事ですからどちらへでもお遣はし下さいませ」と申上げたので近所の佐和山井伊掃部頭直孝の領分石ヶ崎の地に江州の知行五千石をそのまゝ下される事になりました。この様に忠隣は忠義一圖の人でした。又茶湯の趣味も豊かで、數奇屋や植込みなども趣味よくつくり、上方の大名衆に御馳走し又使の者にまでお茶を御馳走し、其上馬などまで御褒美に

ん。家康はこれを感じて直ぐさま忠隣の不在中小田原城を沒收して、忠隣を近江の井伊直孝の所に蟄居させたのであります。それより先「江州の配所へ行くべし」とのお達しが來た事を聞いた家來達は黙つてゐません。無實の罪で身を亡すより一戦して死ぬ方がいゝと言つてこれから京中上を下への大騒動、二條城でも門々をかため戦争の用意をしました。忠隣はこれを知り、小田原から持つて來た甲冑、鐵砲、弓、矢、長柄等一つ残らず繩で絡んで伊賀守方へ渡しましたので、京中も安堵の思をして忽ちに鎮りました。相州の忠臣は皆感動しない者はありませんでした。直孝は忠隣に、無實の罪を着たのですから申開きをなさつては如何ですか」と勧めますと、「申開きを致しますと、必ずお判りになります、さうすれば先君（家康）が讒言を聞き召されて無罪の者を流された事になりますので、先君の過ちを申上げる事になります。これは臣下の私として堪へられない事です。私一人の身が朽果てゝも露ばかりも惜しい事はありません」と答へました。忠隣はあくまでも忠義の士でした。そして子供達には「自分の様に御意に違つた上はどんな死罪流刑に仰付けられるかも知れない。お前達は上意をお待ちして、たとひ親が逝くなつても、上意のない中は必ず自害などしてはいけません。自分は讒言の爲一旦罪に沈

やつたので皆忝がつたと云ふ事もあります。忠隣が沒收された後、小田原城は二丸三丸を破却され、本丸ばかり残され、番城として諸侯が交替に城主になりました。そして忠隣が改易されてから七十年の後再び大久保家が城主になり、明治維新まで藩主をつゞけました。これも忠隣の隠忍自重した心が天に通じたためです。

番城時代

稻葉正勝、正則、正征

【正勝】

大久保氏の後は元和五年（紀元二二八〇年）まで番城。元和の初めは近藤平右衛門秀用が城代を務め、元和五年の末に至り阿部備中守正次、上總の大多喜から移つて五萬石を領しましたが四年の後元和九年には再び武州岩槻に轉ぜられて、小田原城は再び番城となりました。寛永年間には近藤石見守秀用、高木主水正成等が交々城代となり、寛永九年（紀元二二九二年）に再び城主が出來ましたが、それは稻葉丹後守正勝です。稻葉丹後守正勝は當代將軍の乳母とし

て世に名高い春日局の子で、下野真岡四萬石から一躍して小田原八萬五千石の城主となり、しかもお城は公役で修理を加へられる等、幕府から数ならぬ優遇を受けたのですが此の時箱根の關を守ることを命ぜられたのであります。正勝は侍従に任じ老中の員に加へられた程の人物で、資性寛厚の武人で又歌道にも秀でてゐました。

彼は寛永十年（紀元二二九三年）三十八才の壯齡で卒し十二才の正則が遺領を継ぎました。

【正則】

四代將軍家綱の時老中となり、一代の間二度に二萬五千石の加増を得た幸運の人であり、小田原はこの時十一萬石の城主を蔽くことになつたのです。

【正征】

正則は五代將軍綱吉の時一子正征に譲りました。正征は奏者番寺社奉行から京都所司代を勤めました。貞享二年（紀元二三四五年）越後高田に轉封されました。稻葉氏はこの三代で、次には元の大久保氏が城主となつて、先祖の地である小田原に返り咲くことになりました。

後の大久保時代

1 大久保氏の返り咲き忠朝

忠隣の曾孫で父忠職も曾祖父忠隣に連座して一時贅居を命ぜられました。やがて赦免せられ肥前唐津八萬三千石に加増されました。一子忠朝に及んでは家運再び榮える時が來て、將軍綱吉の寵遇を受けること一方ならず老中に任ぜられ、貞享三年には祖先の舊城小田原を復する事が出來ました。元祿七年（紀元二三五四年）には十一萬三千二十九石までに加増され、祖先の領高に勝る事數萬石にさへなりました。忠朝の寛仁大度は世に稱された所で、或時大名の使者が國許からの封書を届けましたが、開封して見ますと書損じの反古なのです。こんな誤を表に出せば忽ち罪人が出るのは云ふまでもありません。忠朝は海の様には廣い心を持つてゐました。こつそり使者を呼んでその誤を示し、別の判紙に淨書させて事を済しました。どんなに使者が感謝した事でせう。忠朝老中職にあること二十一年、此間將軍が其の第に臨む事二回、其都度將軍と忠朝父子三人の四書の講釋などがあつたといふ事です。それ程將軍に信用があつたので封地小田原城に入つたのは隠居後始めてであつたと云ふ事です。

2 忠増、忠興、忠由、忠顯

忠朝の次に忠増が後を嗣ぎました。元祿十六年（紀元二二六二年）十一月夜大地震あり被害甚しく、小田原は地震の上の出火で町は殆ど全滅、死屍九百七十余、死馬十五匹、箱根山は崩れて荷物が道路に塞りました。この爲焼け落ちた天守の修築工事が竣つて間もなく寶永四年（紀元二二六七年）十月復大地震、前代未聞の大變でした。續いて十一月二十三日には富士山の噴火で寶永山が生じ、山下に近い小田原地方の慘害物凄く、降灰の爲に領地の中埋没した所が多かつたのです。それで幕府から復舊工事の完成する迄の間一時の替地として伊豆、三河、美濃、播磨の内五萬六千三百石の地を賜はりました。

次の忠方になり、噴火埋没地を復し前の五ヶ國の替地を還しました。

次に忠興、忠由、忠顯と代りこの代も天明三年（紀元二四四三年）正月二十三日天守閣が北東の方に傾いてしまふ程の地震がありました。

次に名藩主忠貞が立ち、小田原史に最後の光彩を放つことになりました。

3 忠眞の尊王と奉仕の心

忠眞は天明元年（紀元二四四一年）十二月二日（今から百五十九年前）光格天皇の御代に生れました。生れつき非常に体が弱かつたのですが、不斷の修養鍛錬によつて身心共に立派に鍛へ上げた方でした。大久保家歴代の中で一番の名君で十六才で小田原藩主となり、十一萬三千二十九石を領しました。當時の將軍は家齊でしたが文化元年（紀元二四六四年）二十四才の時幕府の奏者番となり、次に寺社奉行大阪城代と次々に出世し、累進して文化十二年三十五才の時には早くも京都所司代に累進しました。京都所司代が幕府にとつてどんなに要職であつてどんな役割を持つてゐたかは既に歴史で御承知の筈。

幕府の役人であり然も或る意味に於いて幕府政治の樞機にあづかりながら、忠眞は尊王の心に燃えてゐたのでした。光格天皇の御讓位の後御住ひあらせられる仙洞御所の御修繕に當つては、誠心誠意を傾けて御用の御勤めをいたしました。仙洞御所の襖繪は應舉を初めその當時の一流の名畫家を集めて畢生の筆を振はせたり、又その御苑には領内吉濱海岸の小石を二十俵拾はせて御用に献上したりしました。

その小石と云ふのは、一粒選りで鶏卵と同じ大きさ、然も同じ形のもので滑かな石といふのですから集めるのはなかなかだつたでせう。それで忠真はお米一升と小石一升と替へさせたと云ふ事で今でも一升石といふ名が残つてゐるさうです。光格天皇は御喜びになり、御愛玩の掛幅及び御染筆の「唐の御硯」を賜つたので忠真は非常に感激し「相模なる吉濱の石を奉りければやがて石と共に敷かせ給ふことはいとも等なく覚えはべりて、

あら磯の波のよせしも玉敷ける

御園の石にならふかしこさ

と詠しました。石の一部は有栖川の宮家へも内獻申上げたので御歌を賜つたといふことです。光格天皇御讓位仙洞御所御移儀仁光天皇御即位等の御盛儀に將軍の御名代として御用取扱ひ、行幸警衛、供奉、御所警備の重任を受け、この榮譽ある重任を全うしました。所司代在任四年でしたがその間天皇、上皇の御覚えめでたく、幾度となく御酒肴を給はり御品を拜領しました。今も大久保家にこの尊い數々の御品が保存されてあるさうです。

この素晴らしい名譽も忠真の臣民として仕へ奉る誠が天に通じた結晶です。平常忠真は楠公を非常に崇拜してゐられたとの事で、これによつても如何に至誠奉公の精神が深か

つたか判りませう。

文政元年（紀元二四七八年）八月三十八才で老中職に陞任しました。同三年には酒匂河原で孝子、節婦、奇特者の表彰を行つたのですか、その孝子の中には二宮金次郎が光つてゐたのでした。その後金次郎の非凡さを鋭くも見抜き藩士でない彼を重臣達の反對に命ひながら拔擢し、その新説に共鳴して綿衣粗食に甘んじ、費用を節し、蓄財して士民救済に用ひ、又軍用金にあてたのでした。

彼は天才を重んじ、我が對露國防に盡した間宮林藏のために種々便宜を計つてやつたり、川路聖謨を幕府の勘定吟味役に推擧したり、多くの人を拔擢した彼は實に名政治家の名に相應しいではありませんか。

天保五年（紀元二四九四年）五十四才に老中首班（首席）勝手掛（財政を司る職）を兼職し、政治の重任を負せられました。職僅か四年で（五十七才）大きな事業を残す暇なく忽焉として逝くなつたのでした。その死が傳はるや多くの人々の悲嘆は大變なものでした。川路聖謨は身を殺して公の病に代りたいと祈つた程でしたし、二宮金次郎、間宮林藏も仕事を續ける力がなくなつたと歎き悲んだのでした。これも忠真の美しい人格に深く打たれた人達的心声からの叫びに外なりません。

を以て従三位に追贈される光榮に浴し、昭和十年（卒後九十八年目）には縣社大久保神社に合祀され、祭神は藩祖忠世と中興の英主忠真の二柱となり、小田原人のお詣りが絶えません。

4 最後の藩主忠禮

忠真から忠禮を経て忠禮の時にありますと時代は目まぐるしく變轉して、慶應三年（紀元二五二七年）十月大政奉還となりました。

大久保家は徳川の直參ですから勤王、佐幕何れに傾くべきかに迷ひに迷ひました。慶應四年二月征討大總督有栖川宮熾仁親王が、西郷隆盛を參謀とし東下の途につかれ、四月一日御一行が小田原御通過の際には忠禮は奉迎申上げ、官軍を勞ひ路次の利便を計りましたが、徳川恩顧の藩だけに聽て又藩中に佐幕論が生じました。それは閏四月十二日佐幕黨の脱徒、請西藩主林昌之助が小田原に来て忠禮に面會を求めましたので城代家老杉浦平太夫を會せますと、徳川に味方して皇軍に矛を向けようと云ふのでありました。勿論承諾はしませんでしたが、林が小田原を去つてからは佐幕を唱へるものも出て参りました。それでも五月二十

忠真は樂翁公（松平定信）の善政を慕つて藩政改革を復舊する事を理想としてゐましたし、尊皇心に燃えた烈公（水戸齊昭）とは肝膽相照した仲でした。この點から見ても忠真の燃ゆるが如き尊皇心、高潔人をも化する其の人格とが床しくも偲び得られるではありませんか。彼は又文藝武藝にも熱心で「楠派の兵書」や「和蘭築城書」「和蘭馬術書」や其他の兵書「和蘭醫方纂要」等を自ら謄寫しました。彼は常に世界の大勢にも注意を怠らないのでした。小田原に集成館といふ學校を起して藩の子弟を教育し、演武館を設け文武ともに奨励したのも忠真でした。

彼の作品として歌集に「春鶯集」三卷あり、隨筆に「春日閑語」あり、七五の詩句あり、畫あり、眞に大名としては珍らしい趣味の豊かな人でした。

見渡せば心にかゝる雲もなし

月にまされる雪のあけほの

「春鶯集より」

たゞ惜しい事に忠真存命中幕府は疲弊し、世は太平になれず修倫安の風になぎり、天災の續いた時代ですが幕府には水野出羽守忠成が一人勢をふるひ、忠真の力が發揮出来なかつた事はかへすくも残念な事です。

忠真は大正七年（卒後八十一年目）には恐れ多くも特旨

日に林が遊撃隊等總勢二百七十余人を率ゐて箱根の關を固く守つたので大久保方の兵は勇戦して之を挫き、一方中垣謙藏をして大義名分を説かせてその請を退け、その時「徳川慶喜は皇軍に服せず既に豆州下田に戦艦を懸装し、海路小田原に来るのも數日の内であらうし、幕府方の諸藩も軍容を整へ目下出府中云々」といふ報が來たので藩論は何時しか變つて遊撃隊に味方する事になり、翌二十一日には林と和談しましたので、藩兵は遊撃隊と合して血氣にはやりに旅舎にゐた勤王の士を十五人討取つてしまひました。その上官軍の軍監中井範五郎が小田原藩激勵の爲に二十一日未明卯五百個持ち早駕籠で小田原を立ち權現坂にかゝつた所を遊撃隊に撃たれ、中井は大聲で「大久保藩はゐないか」と叫びましたが遂に誰も出ず空しくなつてしまひました。三雲爲一郎軍監がこの横死を聞いて、二十二日逃げる用意をしました所藩士一隊に銃を向けられ九死に一生を得て逃れました。二十三日には尊王か佐幕かの城内大評定となり、家老達が悉く佐幕論者に欺かれた事を聞いて中垣齋宮は大いに驚き、急ぎ江戸から歸へりこれを痛嘆して大義を説き、佐幕派は幕府三百年の殊恩を説き武士の節義を唱へ、大義名分論は寧ろ我が侯を欺くものだと憤怒し激論徹宵、中垣の熱烈な論に忠禮大いに悟る所あり急に中垣に家老格を與へ

て、國老渡邊了叟の佐幕論にともすれば壓倒せられ様としてゐたのを救ひました、最後には中垣の尊王の熱論は勝を占め、再び遊撃隊と手を切り小田原退去を命じました。二十四日には忠禮は城を出て本原寺に入り、謹慎の意を表しました。二十六日藩兵の一隊は遊撃隊を追ひ、入生田村字駒爪で大接戦白兵戦を演じて敵壘を奪ひ、追ひに追つて二十九日には殘敵を堂ヶ島で悉く銃殺してしまひました。けれども、前に中井範五郎以下の官軍を殺してゐますので問罪の師を迎へました。忠禮は深く罪を謝し、恭順の實を示しました。六月二日にはその責任者四人は江戸に檻送されたのですが、渡邊了叟のみは藩の處置に委され他の三人は赦されました。藩では渡邊に割腹を命じました。彼は死に臨んで泰然自若徐に最後の一曲を舞ひました。普吐朗々、姿勢と云ひ技と云ひ少しも平日と變る事なく、從容として死についたと云ひます。後、岩瀬大江之進は自ら責を引いて割腹し、官軍の吉井謙藏を斬殺した山田、小泉兩人は斬罪に處せられ、その處刑に降首を斬つた者は吉井の遺子で年のゆかない少年で力弱く、一人の首を落すのに骨が折れたので後れた人がこれを見て、につこりとし「坊ちやま私のはうまくやつて下さい」と嘯きましたので、人皆その豪膽さに驚いたと云ふ事です。何れも堂々たる最後でありま

すが、大義名分を誤つた人々であることを記憶すべきです。

明治時代

明治天皇の小田原御巡幸

明治の聖代が訪れて明治元年恐れ多くも、明治天皇御東行の砌箱根の關を御通過にならせられ、一夜この小田原に御宿泊遊ばされ、小田原市民は有難さに打ち震へたのでした。

北條氏時代の小田原城下町

新城郭誕生とその發展

搖籃の小田原のありし日の姿はどんなものであつたでせうか。——現實の小田原を知る私共として、それは誰も興味ある問題なのです。古書隨所に點綴散見せられる史料

明治天皇御治世四十五年間中炎暑激しき帝都をお避けになつて、他の地に行幸遊ばされた事はただ一度にまじりて、その光榮を荷つたのは箱根宮下温泉なのです。明治六年八月約一ヶ月間の御滞在でしたが、八月四日皇后御同列でその御途次小田原に御泊業あらせられ、八月二十八日御還御の御時小田原の行在所に御着業、天皇陛下には御乗馬で足柄縣廳（今の第二小學校）及び裁判所に御臨幸遊ばされ、三十日まで御滞留遊ばされました。

八月四日、天皇陛下、皇后陛下午後御出門、舊砲臺下の海邊で曳綱を天覽あらせられたため、記念として御駐蹕の地を御幸濱と稱する様になつたのです。

「なるこ引く賤が小田原見渡せば
稻葉の末にさわぐ群島」

と、詠じた和歌が「平安紀行」と云ふ古い本に見えてるますが、この作者は道灌ではないのです。けれども此の歌で大体その頃の小田原が、田園の多い如何にも閑寂な所であったことがおほろけながら想起されるのです。そしてこの頃から半世紀足らずで、小田原は北條時代を迎へてから日本一、二の新興都市として、諸國に魁けて生れたのでした。云はば土肥氏、大森氏の力によつて第一の誕生をなした我が小田原は、こゝに第二の誕生、即ち「青年小田原」として雄々しくも世に名乗り出る事になつたのであります。

小田原の自然景觀

小田原は遠く東に古來洪水で有名な酒匂川の急流あり、こゝは東部からの敵への第一防備線をなし、西と北とは箱根の山が海にせまつて西の守となり、南には相模の海を控へて自然の要害をなしてゐます。従つて關東に攻め入る者は先づ必ず此處で一戦を交へざるを得ないといふ軍事、戰略上重要な地點なのです。この優れた地勢に城を築き、しかも酒匂川、早川の間幅広い平地は大市街を抱擁したのであらうし、又當時の海岸線は今と幾分異り、港としての利

用に適してゐました。それである程度の海上交通の便もあつて、軍船も碇泊させてゐた程でありました。この恵れた自然に圍繞される地、それに英雄が三代も續いた北條氏の居城下となつてから、自然と人力との結合、自然と文化との諧調はこの小田原を一躍日本の大都市たらしめることになりました。

近世史に於ける小田原城下町の意義

小田原が近代的大都市の魁となつたといふ事は、後に述べる通りに、文化的に又經濟的に非常に發達したといふ空間的な理由ばかりでなく、時間的、歴史的に見て大きな意味を持つてゐるのです。この小田原の發達は本邦に於ける城郭及び都市の發達史上から見て、一つのエポックを劃してゐるからです。應仁の亂以前のお城は天險主義による軍事的要塞であつたから、多く山頂に之を築いて町とは全く別になつてゐました。小田原の町の起りをみますと、最初街道に沿うて人家が出來宿驛町を形造り、又交通等が活潑になりますと港灣町が又神社を中心として門前町が發展

しましたが、元來小田原の地は山城平城を築くに適てゐました。平城時代には山城を下方に移すか、或はこれを改造することにより、お城を中心として人口の集中策を講じて、初めて城下町が現れるに至つたのです。これが近世の城郭であつて、城郭を研究するには、どうしても城を中心として成立してゐる城下町を研究しなければなりません。應仁の亂が一般社會状態に大きな影響を及ぼして、所謂殺伐な戰國時代を現出するに至つたので、それと共に一地方の豪族はその自衛上又その繁榮の爲に、自然到る所に城郭か建設されましたが、多くはやはり聚落發展の約束に反して、天險的な山城に過ぎませんでした。かうした時代に大内氏の山口、北條氏の小田原、武田氏の甲府、今川氏の府中、上杉氏の春日山城下の出現は、城郭選地の上に一大革新をもたらしたもので、こゝに「陣營は都市發達の母となり」と裏書されることになつて新たな粧をもつ近世的な城下町は孤々の聲をあげたのであります。これを契機として次第に一般の城下町も發達して來る様になつて、近世封建國家の曙光を垣間見ることになりました。

城下町の意義は——戰國の新諸侯がその分國內で領主權を確立する爲には、分權的な勢力を中心に集中する必要を生じて、こゝに中央集注主義の出現を見る様になつたので

す。中央集注主義は、軍事的方面に於ては家臣を城の魁に住ませ、今までは單に軍事的要塞に過ぎなかつた小城郭から、領地統治の新城下町への推移が、商工都市を兼ねる改造となり、市内に商工業者が集り、人家櫛齒の如く並ぶ新味が加り、こゝに近世時代が開展されます。それには交通の中心となるべき所が必要になつたので、山城から平野に下り、軍事的中心より統治の中心、交通の中心へと移動して來るに至りました。そしてそこに人口を集中させたのですが、その方法には權威で強制的にする場合と、恩典を以て自發的に移住させる場合とありますが、北條氏は後者の場合であつて、その恩恵に吸ひ付けられて、國內の人は勿論遠い他國の人々までも欣然と集つて來ました。早雲は常に「國主の爲には民は子であり、民の爲には領主は親でなければならぬ」と、言つて居りました。この考へを政治の根本精神としてゐたのですから、人心が皆彼の支配下に甘んじて歸服したのは當然です。早雲が葦山を取つた時に「前々は税が高かつた爲に、百姓が困つてゐると云ふ事を聞き及んだ。今後は五つ取の所を一つゆるし、四つ地頭におさめよ、地頭は此外にはたゞの一錢でも取つてはならぬ。もしこの法律に背く者があれば、百姓達直ぐに申出よさうすれば地頭職を取上げてしまふから」と云ふ意味の高

札を立て、人民の負擔を軽くしたものですから、皆北條氏の治下に集つて來ました。五つ取る所を四つおさめよと言ふのは、所謂「四公六民」のことで、今までは收穫の半分を税として地頭に納めてゐたのを、四割でよいといふ事です。當時他の諸大名や他の領地の中には色々な加税を掛けて、租税は極めて高かつたのですが、領内の人々が「北條氏萬歳」を謳歌したのも無理ありません。

氏綱、氏康も亦早雲の精神をついで、政治に心を注いだのは勿論でした。北條氏の政治のうち、漁師町に對するものに、船を持つてゐる者はその漁獲物を出せばいゝ事にし船大工は一年中に三十日務をすれば、この外一文も出さなくともいゝし、大工でも刀劍師でも、何か一つの職業の覚えある者は皆勞力で義務を盡す規定があつたのです。

年貢米を納める時の翻れ米は普通皆役人の所得になり、その高もなか／＼多いものでしたが、北條氏はこの米も一粒でも取上げてはならぬ。これは皆百姓の物たるべしと觸を下ろしてゐます。このやうに、なるべく民の負擔を軽くし、その上産業保護にも氣をつけてゐます。農作物は出來るだけ奨励し、又或職業には格別の特權を與へてゐます。鮫追船、石切の棟梁、商船などには税をかけず、その業にさへ熱心であればいゝといふ事にし、又鑄物師には軍事上

の關係からいろいろの特權が與へられました。開墾も大いに奨励し、開墾地には三ヶ年間又は七ヶ年間などと免除してゐます。

北條氏の徳と手段との宜しきを得たもので、多くの人々はその城下に集中され、然もそれら民衆の何れもが大に悦服したのも決して偶然ではありません。當時大名は攻城野戦にのみ心を注いだ時代に、北條氏が領内政治に着眼しました卓見は、眞に敬服の外ありません。

早雲の廿一ヶ條は實に其の一端を示したもので、彼こそ當代に於ける爲政家の先驅をなした人でありまして、後四代相つゞいて關東に雄飛して、秀吉を手古すらしたのも宜なる哉の感がするではありませんか。

北條氏の善政と文化の保護

一、城郭としての經歷

小田原は城郭として如何なる變遷を経て來たものでせうか。土肥、大森時代の城郭は前述の如く文献なく、天險を頼みとし、その居所は館の如きものでつたらうと想像する外なく、その規模すらも明らかではありません。北條氏時代に早雲が當城を得ても本據は菫山に置いて小田原には

城代を置いて之を守らせたのですが、やがて氏綱、氏康と時代の移るに従つて次第に規模を擴張し、全く中心が小田原に定まりました。當時の城郭は相當堅固な結構を構成したものでありますが、まだ完全とは言はれないでせう。或る論者は現在の本丸、二の丸、三の丸が城内であつたと言つてゐます。

永祿年間に謙信、信玄が蓮池門まで攻めて退いた後、永祿十二年十一月大修理を行ひ、天正三年には小曲輪門々の開閉に關する控等を出して平常の警備にもそなへ同七年には城構の修理に着手しました。之から天正十八年までの間は再三修理造營を行ひ、遂に城下町を含む大小田原城が完全に出來上り、長期の籠城に備へたのでした。一説には支那の市城の制を倣したものだといふ「新編相模風土記」等にもありますが、外郭が非常に不規則ですから、長い籠城を目的として必然的に考案されたものと見ていゝでせう。假令模倣と云つても、その着想だけに過ぎないと考へられます。城の外郭の日本で一番大きいのは江戸城で、次が小田原城、大阪城ですから日本第二に位してゐます。この外郭は天下に誇るべきもので、又關東では江戸城について石垣をよく使つてゐます。城内の計畫も用意周到な注意が拂はれてゐて、道路は複雑に曲つて、外から攻めて來た人に見透しが

つかぬ用意がなされ、城郭の外の際には所々方々に神社佛閣を造つて置き、いざ戦争となると寺は兵士の宿所に變り墓石は塹に、五重塔は見張の櫓に利用されるのです。又海岸に三つの砲台を備へて海防にあてました。これがもとになつて幕末の頃、早川口から小田原に至る海岸の低い砂原に江川垣庵（二十六代目の先祖英元は、北條氏綱に従ひ鴻ノ台に先驅の手柄を立て、其の子英吉は菫山籠城に勲功あつた人）が時の小田原侯の需めに應じて、世に謂ふ「小田原のお台場」を拵へたのであります。御幸の濱伊藤公の滄浪閣邊にみる台場跡がその一つで、纔に往年を追懐せしめてゐるではありませんか。「北條五代記」に氏直は周り五里の大城を構築し、關東の人々百姓まで雇ひ置き、天下を引請け「百日攻むと雖も落城せず」とありますが、百日以上も天下の兵を向に廻して戦ひ得たのでした。これは前述の如く、早雲、氏康など城郭築造法に新紀元を劃したものをつくつたので、後桃山時代にかけて續々と造營された城下町を包む廣大な城郭の多いのも、この小田原の實蹟に依つたものであることを想ふとき、眞に痛快ではありませんか。たゞ周り五里といふのは當時の記録で、軍部の方の實測によりますと周圍は二里八丁だつたさうです。そして北の方は天守閣に到るまでに十二の防備線（濠）が配置され、南

大手方面には四つの防備線があり、所々に枳型と稱する勢揃へをする所も用意してあります。今の釣鐘のある所、松原神社、中學校のある所、海岸の方面等にもその址と見られるものがあります。北條時代の小田原城は天下の名城で軍事上からも盛に研究されてゐます。

前大久保氏時代には北條氏のものをもそのまゝ受け継いだのみで、その格構に變りはありませんでした。

慶長十九年家康が大久保氏から召上げ、親ら下知してこの貴重な外郭を初め本丸、二の丸其の他の城門石垣などを破却させ、小田原城の一大特色が惜くも失はれてしまつたのでした。この時次の稻葉氏時代の圖に示す格構との相異も出来たと認められます。五年間番城となつた後阿部氏にかはり、僅か四年で再び番城となり、寛永九年に稻葉氏が封ぜられると先づ城の修理の命が下つてゐます。後大久保氏時代も凡そ大きな變更はなかつたのですが、元禄十六年の大震には殆んど總べての建造物が崩壊し、天守閣其他焼失しましたが、寶永二年には復舊して小田原人は再び三重の天守閣を湘南の蒼穹に仰ぎみるこゝろになつたのであります。

江戸末期に、時勢の要求から少からざる費用を投じて海岸に面して洋式砲臺三基が幕府の命で鐵砲方田方主計によ

つて築造されました。これに江川垣庵の助力のあつたことは前述の通りです。これは當時江戸灣の防備として築かれた品川臺場と共に、江戸の外輪をなす相模方面の防衛として造られた模範的な砲臺でした。

明治三年藩力ではお城を維持し難くなつたといふので廢城を願ひ、之から次第に各建築は取毀されて天守閣も失はれ、濠等も改廢されて、哀れ今日の状態となつてしまひました。

私は此の稿を書き綴る晩春のある一日、夕陽を深く身に浴びつゝ唯獨り、此の古城の天守閣に佇みました。然し當年の劍戟の聲も馬蹄の響も聴くに由なく、只そこには幾星霜の雨にうたれて苔蒸す斷礎が累々として横たはり、僅にその間に生ひ茂つてゐる夏草に、つわもの共の夢の跡を偲ぶのみでした。たゞ私の胸には「國破れて山河あり城春にして草木深し」の哀調を帯びる晩春譜が、寂しくくりかへされて、限らない懐古の情が去來するのを禁んじ得ませんでした。

小田原の文化

新都市の商業

小田原城下町の商業

鎌倉時代に榮えた鎌倉の文明も幕府が滅亡し、續いて室町時代の管領政治が衰へてから、それがそのまゝ、小田原に移つてしまつたかのように見えました。新興都市小田原の繁盛は鎌倉のそれにもまして、取引の賣買額も非常に多く、その利益は莫大なものであつて、當時の東京都の四條、五條のそれよりは大きく、關東隨一の都として、西の山口と並び稱せらるゝやうになりました。

その賣買の品物は山海の珍寶や琴棋書畫に至るまで、其の上まだ見た事も聞いた事もない様な高級な舶來品までも積み重ねられて、其の繁榮は目醒しいばかりでありました。従つて、小田原を中心とする北條氏の支配下にあつた人々の生活が、どんなに豊かであつたか想像されませう。そして東の方は一色から西は板橋に至るまで、一里(約四軒)もの長い間に商店、見世がづらりと軒を並べて新市街を形成しました。

永祿九年(紀元二二二六年、氏政の時代)の春三浦半島の三崎へ支那人のお船がついて、數々の美しい珍物を齎したのでした。その中には錦や刺繍の織物、種々の焼物、沈香、麝香等の香料、珊瑚、琥珀の珠等々あらゆるものがあり、それを小田原に運ばせたところが、四五日の中に忽ち賣れてしまつたと云ふことです。やがて支那人は非常な利益を得て喜んで歸國しましたが、こんないゝ所に住んでるといふので、歸國しなかつた支那人も大勢居りました。

北條氏はこれらの支那人に町屋(今の商店の事です)を與へましたので、小田原に永住し歸化してしまひました。今の唐人町は其の當時彼等が居住してゐた所であつて、今でも其の子孫が残つてゐる筈です。

今でも東部日本で珍重されてゐる藥外郎は、三百五十年の歴史ある名藥として残されてゐますが、その製法は歸化した祖先から秘法として家傳されたものなのです。

又市場横町には魚座屋敷がありました。魚座といふのは魚商人の組合で、これに屬するものが八十軒もあつたのでした。其の他六種類の座商(組合商人)も多く集り、當時新

勃興の城下町として日本第一のものでした。

陸路の交通として、西は箱根、伊豆半島、東は大磯から鎌倉、江戸への道路の交叉点として要所を占め、宿驛としての中心であり、諸國から多くの商工業者が集り、従つて問屋もこれに伴つて發達することになりました。

小田原はかくの如く關東に於ける政治、軍事、商業上の大中心地であるばかりでなく、工業方面にも亦異常な發展を遂げたのです。

工業と新武器

小田原の工業の發達は戰國時代なので時代色が見られ、殊に兵器の製作と鑄物の製造の盛なことです。多くの鍛工中で最もやかましかつたのは、世に名高い相州正宗で、鍛冶曲輪には正宗使用の水鉢と稱するものが今も残存してゐるさうです。

今の萬町三丁目を前には鍋町と申しましたが、これは當時鑄物師が住んでゐた一廓で、こゝに巨大な溶鐵爐を設けて、盛んに大鐘、釜鍔の類を鑄造して關東の諸國に販賣してゐました。その後北條氏が滅亡し、江戸幕府が開けてからも、なほ關東の鑄物は多くこの小田原に仰いでゐたとい

この戦に多數の鐵砲が用ひられ、こゝに隊を組んでの新戦法が應用された所にあるのでした。この新兵器の製造所として、我が小田原は實に東部日本の中心であつたのでした。今も残つてゐる小田原の町名。

今の萬町三丁目は昔鍋町と呼び、夥しい鑄工が居て盛んに鐵工業をしたのでした。初めてここに來る旅人が溶爐から絶えず上る煙煙が空を焦すのを見て、火事だと吃驚する程盛んなものでした。そしてその事業は小田原城郭内ばかりでなく、酒匂村から鴨の宮に至る北の横町にも設けられて盛んに製作したといふ事で、今もこゝに數戸の鍛冶屋が名残りをとどめてゐます。

其他大工、墨職、石工、染匠等の工業も皆備つて盛んなものでした。

大工町は昔から大工の集つてゐた所で、青物町は青物市場のあつた所であり、私達は今も在る町名によつて色々當時の面影を憶ふ事が出來ます。眞に戰國時代に於いては關東に於る最も進歩的なまた近世色ある城下町でした。

天正十七年に北條美濃守氏規が上洛した時、京都の町は皆板葺だつたのを見て、小田原に歸つてこの由を氏直に申しますと、氏直はすぐに屋敷を改造させて、大路の家を皆板庇にさせました。これが世に謂ふ小田原葺で、全部を葺き替

ふ事です。其の後江戸が股賑になるに伴ひ、小田原から多くの鑄物師が移住して、集合した所が所謂東京の釜屋堀ださうです。釜屋堀の元祖は實に小田原の鍛工で、後北條氏時代小田原で鑄造した鐘は非常に精良で、音響が殊に好いと云はれました。

これら鑄物師の先祖を山田治郎右衛門といひ、河内の人で天文三年（紀元二一九四年）に小田原に來て北條氏の命によつて銃筒、陣鐘等を鑄造しました。天正十四年（紀元二二〇五年）には鑄工の棟梁となつて、多くの人を支配して鳥銃銃丸、中銃の鑄造を命ぜられたり、天正十七年（紀元二二〇八年）には龍城の準備として大銃二十挺の鑄造を命ぜられたりしました。鐵砲の製造は當時の技術では容易に出來ないもので、一挺七日と限つてそれを越してはいかぬ。七日中に必ず納めるやうにとの無理な注文に應じてゐます。これを見ても、如何にこの鐵砲が大切な武器であつたか判ります。序でに鐵砲が關東に早く弘つた沿革を御話しますと、鐵砲は天文十二年に初めて日本に渡り、間もなく北條領の人が堺に行き、早くこの製法を傳授されて歸へり、直ちに北條氏はこれを鑄さしたもので、六七年中に東部日本にこれが傳播したのですが、かの川中島の戰の意義は、たゞ武田、上杉兩名將の顔合せといふのみでなく

へたのではなく、先づ本道に面した街の庇をなほさせました。近國他國の人々が都（京都）の町作りを學んだ小田原の町を見物にやつて來て、すなりと並んだ板庇を見てそれらの貴賤男女が異様の眼を輝したと云ひます。これは當時都以外は殆ど草葺の屋根ばかりだつたからでした。京都や奈良は奈良平安時代の大都會であつても農民が可なり多數市内に居住して居たのですが、我が新興都市は商工業者が多數住み、その爲に近世的要素とそれに伴ふ新粧とがこ

趣味生活

早雲は「文を左にし、武を右にす」と云つて學問、武藝共に奨励しました。殊に「歌を知らない者は賤しいことだ」とその法度（法律）に書いてあります。

當時津田藤兵衛と云ふ者あり、幼い時から書を好み、非常に上手だつたものですから、早雲はこれに宅地を與へ、旗幟帷幕等の染物を命じ、染工に轉業させました。後京に上り、禁裡の御服を造染しましたから大和守と名のことと、京紺屋と稱することゝの御許し給はることになりました

た。又始めて柿色を造染したので俗に「大和柿」と稱し、世間に流布されたといふことです。かういふ天才を見出し保護した早雲はたゞ勇將としてのみならず、かゝる意味に於ても敬服すべき人物ではありませんか。

早雲の末子である北條幻庵は小田原文化を代表する人物でした。幼名を菊壽丸といつて眞言宗の僧でしたが、後還俗して長綱と稱し、氏綱、氏康、氏政三代に仕へ故實禮法に通じ、文武の道に秀で、ゝりました。尺八を作る事も上手でよく一節切りの尺八を作り「幻庵切り」の尺八といへば小田原は勿論、京都にまで其の名が聞え、恐れ多くも禁中からも御沙汰があつたと云はれた程でありました。幻庵の屋敷址は今も足柄村久野に幻庵屋敷跡といふ所があつて、小さな祠にその靈が祀られてあります。

幻庵の影響で此頃は非常に茶の湯が流行して、北條家の一族は元より、身分のある武士が久野萩窪に山莊を作つて都から茶博士宗仁が小田原に来て、四季の茶の湯の催があつたり、殊に尺八を吹く事が流行の一つでした。こゝに私達は、兵馬倥偬の戦亂の裡のたゞ中にも、かうした「わび」と「さび」幽淡虚白の境地が彼を中心に展開せられぬところ、近世初期文化の味と香とを見出すではありませんか。

多くの園藝家を招いで之を栽培させました。その邸宅は今の唐人町にあつたさうです。今も士族屋敷にある「藪枯し」といふのは血止め薬に用ゐたもので、當時栽培した物が残つてゐるのだといふので、小田原では「北條草」とも云はれてゐます。

お花畑町は當時花畑のあつた跡で、池を堀つたり、築山を造つたり、色々のお花を植ゑて遊園地としたのでした。北條氏が單に農産物ばかりでなく、園藝の方まで注意した事は、文明の程度を高めた事が知られます。新しい事業と共に開墾を奨励してゐます。

天正十八年に秀吉が關東に下つて、小田原勢が愈々籠城とさまつた際にも、將棋、雙六を打つて遊ぶ所もあり、酒宴、遊舞をなす所もあり、爐をかまへて朋友と靜かに數奇に心を寄せることも出来、詩歌をよみ、連歌などをする靜寂な所もあり、笛鼓を打ち鳴しつゝ舞に興する陣所もあり、戦中に閑日月を作り豊かな趣味にひたつたのですが、

幻庵は之に堪能でしたので、小田原武士で尺八を弄ばないものが殆ど稀なほどでした。

二代氏綱の時には唐人が織物、書畫、沈香、陶器などを小田原に持つて來てゐます。書畫陶器の輸入は茶の湯に用ひ、沈香は香道、茶の湯に用ゐる爲である事は云ふまでもありません。又氏綱は和歌を嗜み、文學にも趣味を持つてゐました。氏康の著と云はれるものに「武藏野紀行」があります。

當時は戦國時代ですが、能樂や連歌が盛んに行はれました。北條氏もこの新興藝術を奨励し、能樂も屢々催され、連歌も大層流行しました。氏康の時に、有名な連歌師宗牧を三度も城中にまねいで歡待しました。

杯の春幾巡りけふのまも

千代を浮ふる初櫻花

庭は雪雲を軒端の山櫻

農業文化

北條氏は又種々農産物園藝の事も奨励したのでした。朝鮮から人參だの其の他多くの藥草などを取り寄せ、同時に

これは京都文化を代表する秀吉の石垣山の催と相對して、共に戦ひの餘裕を示してゐます。

戦國時代に於ける小田原の文化生活は、その豊かな點に於いて天下に誇るべきです。この様にあらゆる文明が進歩してゐるのは、實に早雲、氏綱、氏康の奨励と保護によるものが多かつたのです。

この小田原城下町の繁榮はその政策上にも重大な意味を有するものでした。

北條氏の小田原はその模範的なもので、或る者は北條氏の意のまゝに招居せしめ、或は商業的な要素を集めて城下町の經營に苦心しましたが、北條氏の都市建設は恩典慈政によつて、自國及び他國人までもその城下に自發的に移住させたので、自然に領主と人民の固い結合が成り、美しい城下でした。北條氏が最後まで籠城策をとつたのも、この長い努力と基礎の上に立つての事なのでした。

小田原の婦人

1 天目山の哀花武田勝頼夫人

武田勝頼夫人は北條氏康の女で、勝頼は長篠の一戦で織田徳川勢に敗れてから其の軍は萎靡して、甲風日に凋落することになりました。曾ての敵國北條氏の援助を受けるために婚姻を結びました。戦國時代に多くあつた政略結婚だつたのでしたが、夫人は誠心誠意夫勝頼に仕へました。けれども不幸にも幸運にめぐまれないで、やがて兩家が悲しくも又反目することになりました。この間にあつて夫人の心痛とその覺悟とは悲壯なものでした。天正十年三月勝頼は遂に織田徳川の兩氏の兵に攻められ、今は一族郎等四十騎ばかりと女房達ばかりになつてしまひ、心細くも甲州天目山を指して逃げのびました。

勝頼は最期の近づきつゝある事を悟り、夫人に向つて、「もう此處まで来れば相模路も近いから御身はどうかして小田原に落ちのびなさい、たとひ敵に逢つても女の事だから殺される様な事はなからう。小田原にさへ行けば氏政殿も、御身は妹だからつれなくはないでせうから、そして自分が戦死したといふ報を受けたなら尼にでもなつて後をお申ひ下さい」と云ひますと、夫人は涙をばらばら流し、「何を仰せられます。私が嫁してからもう七年になります

私はたとひ玉の輿に乗せてお送りなさらうとなすつても決して故郷へは歸りは致しはせぬ、あの世までも共に御連れ下さいませ」と泣き沈みますと、勝頼も涙にくれ「よくも云つてくれた、それでこそ勝頼の眞の妻」と悦びと歡きに胸が一杯。夫人は「私はお先に三途川迄參つてお待ち申上げませう、この上何も御心配下さいませぬ様に」と云ひ、やがて敵が間近く迫つて来た事をきゝますと、夫人は常々誦み馴れた法華經を取出し聲も涼しく讀み終り、髪を截つて「黒髪の亂れたる世ぞ果てしなき、思に消ゆる露の玉の緒」と辭世の歌を詠み、心靜かに自ら守り刀をぬいて口に含み、うつむき伏しますと、勝頼は急き立ちより介錯しました。お供の人達もこの痛ましい奥方の御最期に聲も立て得ず涙に咽びました。

勝頼夫婦の最期は天目山の戦ひとして最も同情をひいてゐるものですが、天目山と云つても麓に近い田野の里です。勝頼の最期までお伴した士は四十一人でしたが、夫人を始め待女が五十七人最期に殉じたのでした。これによつて勝頼夫人は如何に常に多くの待女等を心から愛していたか判りませう。時に天正十三年(二二四二)三月十一日、櫻の散る頃美しい人々の貞烈に殉じた偉大さは我が日本の婦人だけに見らるべきもので、然も北方(夫人)がその中心

であつたことに泣かされぬ人は一人もないでせう。今でも武田菱のついた田野の古寺の山門が破れながら淋しくたつて、それにハラ／＼ふりかゝる落花に目をやるとき、その上の婦人の餘香の漂ひ思はず涙させらるゝものがあります。

2 賢母氏康夫人の教育

今川氏親の女で、今川義元の妹で、多くの子女(男六人女六人)を訓育して、それ／＼立派な人間に仕上げました。即ち氏政は嫡子、三男氏規は葦山城を固守して、最後まで秀吉軍を一步も東進させなかつた智謀勇膽の武將で、氏政氏照自裁の時、殉死しようとしたのをとめられ、氏直と高野山に入り、秀吉は彼の忠勇義烈を感じ河内狭山城主にしました。その子孫は前述の如く明治二年子爵を授けられて今日に至つてゐます。女では戦國時代の烈婦の第一におされる武田勝頼夫人を出したことを忘れてはなりません。

3 氏政夫人の哀悼の歌

百日餘の蟻も漏さぬ程に圍まれた小田原城には數萬の兵

が籠り、城中に糧食彈藥はまだ數ヶ月を支へる事が出来るだけありましたが、松田憲秀の様な人が出で、また遠く小田原と連絡をとり、相應じて小田原を遙かに守る八州の諸城も敵のものとなり、小田原が全く孤立してしまつて士卒は互に猜疑したり、闘志がなくなつて来たので、氏直は意を決して自分の命を捨て、父氏政以下の士卒の命に代らうと秀吉に申出たが、その結果自分は高野山に追はれ、氏政、氏照の二人は自刃を中渡され、共に憐れ小田原開城の犠牲となつたのであります。關八州に雄飛した全盛時代よりこの悲惨な運命へ顛落しました時、氏政への追善としてその内室が手向けたその力なき聲は、

南そへなく世はをしのべて見る花の、散つての後

は形見何とも。

無れつゝも皆もてはやす花なれど、散りての後は

誰も問來ず。

阿こがれて暮るゝも知らぬ春の花、かつちりのこ

せしたふ心に。

彌ちのべに色うつくしき花盛り、うつろひぬれど

見る人もなし。

陀ちよればなまめく色の花なれど、散りての末は

人も眺めず。

頭字に南無阿彌陀の五字を連ねてその後生を弔ひ、北條の盛んだつた頃を花盛りにとへ、その亡くなつた面影を偲びつゝこれを慕ふ遺る瀨ない眞情を吐露したもので、感慨無量です。

4 家庭を死守せる忠隣夫人

父は徳川氏の家臣、石川日向守家成で姉川の戦其他で戦功のあつた人です。時の人日向御前又は谷津様と呼んでゐました。日向屋敷の寓居で婦人は老母（忠隣の母、忠世の室）に事へ、其の子女（六男一女）を教養し、嫡孫仙丸（當時十一才忠職のこと）の身を慮り、更に遠く琵琶湖畔に配所の月を眺めてゐる忠隣の身に降りかゝつてゐる妖雲の吹拂はれる事を朝な夕なに祈念しつゝ、春秋十一ヶ年の長い間貞烈苦節を盡しましたが、遂に青天白日の麗光に浴する事が出来ないうで夫君忠隣に先立つ事四年、寛永元年九月二十八日この屋敷に淋しく亡くなりました。今日舊茶畑の正恩寺にある夫人のお墓に詣づる者は誰でも忠隣夫人のこの美しい心情に胸を打たれるのです。

5 日本婦人の典型太田備

武州岩付の城は氏政の二男氏房の居城でしたが、氏房は小田原の籠城に赴き、その留守中に伊達與兵衛太田三樂などが守つてゐましたが、淺野正忠等に攻められ戦敗れて大將伊達與兵衛等降参しましたので、重なる武士の妻子も捕はれ、小田原まで送られて、殺されるといふ無情振りでした。たゞ家老衆の妻だけは處刑を延ばされ三の丸に入れて番を付けて置きました。

その當時太田三樂の妻は、心丈夫で氏房の妻へこの人は太田三樂の妻の娘なのです（を始め多くの女房等を一条乱さず引率して刑場に赴く有様が誠におちついた確かりしたものでした）。

秀吉はこの潔い婦人の態度に感じ、之を授けてその領地さへ與へて優待しました。これも事非常の秋にあたり落着いた日本婦人の典型ではありませんか。

結 論

古の歌人の謂ふ「鳥が啼く」てふ「あづま」、地理學者の呼ぶ富士帯以東坂東の地は自然地理上のみならず、こゝに關東氣質が育れた別世界であり、此別天地である關東の正門を箱根山とすれば小田原は實にその表玄関をなすものであります。かの日本武尊の「吾妻はや」の御嘆詠こそは、今は亡き妃の永へに眠らるゝこの別天地へのこれを限りの別離あり、過ぎこし方への追憶であり、私共はかうした神さぶる史實を考へる時、風土が如何に人文に強い影響を及ぼすかを見出し得るではありませんか。ではこの表玄関である小田原の開けたのは何時頃からでせうか。——それは言ふ迄もなく北條氏に始まるのです。一介の浪士から身を起した早雲の小田原城攻略は、たゞに一個の北條氏の運命に關する計りでなく、又實に小田原發展史、否、日本政治史上、文化史上大きな動きを與へるものであることを忘れてはなりません。そしてこれから戦國の序幕は開かれます。かくてやゝもすれば上方即ち京都文化に押されがちであつた關東文化は約一世紀の間、こゝにのみじくも其の優越のスタートを切る事になつたのであります。やがて北條氏は——小田原は東日本の樞軸的勢力として日本文化のチャ

ンピオンたる地位をかち得たのであります。そしてこの小田原の文化は主に鎌倉、駿府（今の静岡市）からのものを基調としました。一方遙に京都支那西洋から夥しく移植されたのであります。早雲の創業——氏綱、氏康の守成等——北條氏累代はいづれも亂世の英雄を兼ねるに治世の名君であり、天險箱根を背に、この町を中心として東方關東併有の覇業と文化の集中とが、一糸の乱れぬ中に推進されたのであります。

それでは北條氏時代の小田原が有つ日本史上に於ける位置と價値は何時あつたでせうか。此の答に對して私共は、かう應へ得るのです——小田原は實に關東に於ける鎌倉の文明を繼承し、更に新文化を加へ後に來る江戸に移植する媒介者でもありました。此の意味に於いて、江戸人の爲めに鎌倉文化を中繼して中世文化と近世文化との橋渡し、云はば、バトンタッチ——てふ歴史的文化的な役割を演じたとも云ひ得るのではないでせうか。小田原文化は又鎌倉創成期の光明と、桃山ルネサンスでふ創造清新の氣溢る豪華版とを結び着ける立派な役目と意義とを有するものなのであります。これを大きく評價すれば、小田原は中世

の子であり、そして近世の母であり、そこに小田原、否、北條氏のひたぶるな努力は、どうしても認めなければならぬのです。けに小田原こそ、日本文化の推進であり踏石である——と云ふに何人たりとも抗議し得ないであります。

やがて歴史は流轉し、三つ葵徳川三百年の治世ともなり、西面の形をとり、こゝに關八州の天地が政治上、特殊の意味を有つことになり、その表裏關たる小田原には有力なる譜代大名を配して箱根の關所を守らせたのであります。けれども幕末にこゝに尊王心が育まれ、農業日本の指導精神が生れました。

かうした不眠不休の時の流れに喘ぎつゝ小田原の人と土とが織りまぜた史説の干紫萬紅——我等の小田原文明繪巻はこれで閉ぢられます。それはたゞ小田原の素描にしか過ぎなかつたとは云へ、私達の心の中にはいつかあやしい幻像が夢のやうに浮び傳はり、その一つ一つが懐しくも魅つて來るのを禁じ得ないのであります。

小田原の文化も其の情調も今は痛ましく改作せられてはゐますが、私達の小田原城を中心とする街の此處彼處に、或は郊外の破れた築地の農家のほとりになほ拭ひ落せない

舊文物の餘香が心ゆかしくも残つてゐるやうに思はれるのです。そしてそれらにはあらゆる「私共の胸の中に生き動く人々の息吹が、足跡が印せられてゐるのではないでせうか。

建設、榮華、荒廢、埋滅、そして悠久——今や忘れられようとする小田原の歴史。そして人事は新たですが、近く西、石垣山の翠微より、薄雲の如き足柄、箱根の連峰までさして更に遠霞淡き伊豆の山々、漁笛響く御幸の濱の南浜遙か萬葉の中に雪降りし沖の小島を偲び、興亡つねならぬ人の世を外に遠い昔の姿のまゝを私共に映じてゐます。私達の郷土の過去をたづね、現在を知る私共には、かうした小田原の晩春の景色がただもう甘い感傷なしには見られないのです。そこに史人、否、詩人ならぬ私共にも母なる郷土小田原に寄せる限りなき愛着とやる瀬なき思慕がなくてどうしませう。

けれども時が動き、生命が動き——そして新しい時代が生れて來ることを私共は知つてゐるのです。廢址に立つて唯懐古の感傷に酔ふばかりでは何にもならないのです。小田原の歴史をたゞ心に緝くのみでは、それは夢を見る欣びを味ふのに過ぎません。では私共の求めるものは一体何んでせう？。埋滅の底に眠つてゐる力——これこそ私共の求

めて止まないものなのです。その過去が存し、私共の心のふるさとが有つ偉大な力を吸収しなければならぬのです。そして其の力をより美しく現實に生かしかることに依つて、お互の永遠の生活線をよりよく意義づけて行くことなのです。即ち、心から親愛する郷土小田原の魂に口づけて、土に祈り、人に謝する心境——それはやがて内から外へ、近くから遠くへ、祖郷に還つて祖國を愛し、意識的な祖國愛を永遠化し強化してゆくことなのであります。

想ひそゞろなる永遠の郷土、無限の史趣と温かき土の香を盛る母なる小田原——その母より流れ出る無限の母乳にこそ、汲めども盡させぬ醍醐味を求めその永遠の幸を祈らうではありませんか。

〔この稿松本ゆり教諭編輯〕

昭和十三年五月二十一日 印刷
昭和十三年五月二十四日 發行

【非賣品】

編輯兼發行人 神奈川縣立小田原高等女學校內
杉山宮治

印刷人 神奈川縣小田原町幸一ノ一二九
石橋貞吉

印刷所 神奈川縣小田原町幸一ノ一二九
又進堂印刷所

發行所 神奈川縣立小田原高等女學校

終

